

座光寺小字名の意味・由来

【間ノ沢】

アイノサワ。

この小字は土曾川を挟んで、南原段丘と米ノ原段丘の間にある。

アイ（間）とは、「物と物との中間」（広辞苑）をいう。

アイノサワとは、文字通りで「段丘と段丘の間に川が流れている所」をうのであろう。むろん、土曾川のことをいうのであるが、土曾川名よりも古い可能性がある。土曾川と既に呼ばれておればアイノサワと名付けることはなかったのではないか。どうであろうか。

アイノサワには「川が合流している所」の意もあるが、ここでは当てはまらないであろう。

全国地図にはアイノサワ地名は、中・大字として15ヶ所に挙げられており、うち6ヶ所には「間」の字が宛てられている。

【間ノ田】

アイノタ。

国道153号線の南側にあって、ゴンガ小字に挟まれている。

アイノタとは何を意味するのか。分かりにくい。まさか「ゴンガ小字の間にある田んぼ」ではあるまい。語源辞典に沿って二説を挙げたい。

①アイはアヒ（相）で、アイノタとは「共同で所有している田んぼ」か。収益は惣堂の管理などに使われたことも考えられる。

②アイはアヒ（合）で、アイノタとは「道路の合流する辻の近くの水田」を意味する可能性もある。現在は五叉路になっているが、地名発生当時はどうであったのか、はっきりはしない。

全国地図にはアイノタ地名は、2ヶ所

に、中・大字として挙げられている。

【青木】

アオキ。

国道153号線と飯田線の間にある小さな小字である。

全国地図に中・大字として採られているアオキ地名は79ヶ所に及ぶ。それだけありふれた地名である。しかし、その意味が明らかであるとはいえない。

アオキとは何か。「年中、緑色をした常緑の目立った樹木のあったところ」であろうか。カシかマツの大木があったのだろうか。

【青島】

アオシマ。

天竜河畔の三ヶ所に散在する。地名発生時には、天竜川に水に洗われたことが年に数回はあったのであろう。しかし、樹木が生育するには妨害にならなかったのではないだろうか。

アオシマとは何か。二説を挙げたい。

①アオシマとは、字面の通りで「かつては樹木の茂っていた島であったところ」を意味するのであろうか。

②アヲは「湿地」も意味する（語源辞典）。アオシマとは「湿地で耕作がしにくい島であった土地」をいうのかもしれない。

【秋葉山】

アキワサン。

麻績神社北側の山地にあり、ホンジョウ小字に接している。

静岡県周智郡春野町の秋葉山にある秋葉神社から、各地に勧請された分社が、この座光寺のアキワサン小字にもあったのかもしれない。現在、麻績神社には秋葉社がある（村史）。

秋葉信仰とは秋葉三尺坊を大権現とする修験道で、焼畑神事の名残であるという指摘もある。権現は神仏習合の象徴的な存在でもあったので、明治の神仏分離

で大打撃を受けている。秋葉講の形で、現在でも秋葉信仰は伊那谷南部の各地に残っている。

全国地図には、アキバヤマ・アキバサン地名が、中・大字として20ヶ所に残っていて、宛てられている字はすべて「秋葉山」となっている。

【畦地・畦地下】

アゼチ・アゼチシタ。

南大島川右岸にアゼチ小字があり、その下流側に二ヶ所のアゼチシタ小字がある。

アゼとは、元来は田や畑の間に少し土を盛り上げた所をいうが、この場合は当てはまらない。語源辞典によれば、アゼは「微高地とか自然堤防」をいい、チは「場所」を示す接尾語であるという。

従って、アゼチとは「川岸で氾濫原より少し高い土地」をいうのであろうか。

アゼチシタとは、「アゼチ小字よりも下流側にある土地」をいうのであろうか。

アゼチ地名は、全国地図の中・大字として5ヶ所に挙げられており、うち4ヶ所は「畦地」の字が宛てられている。

【雨坂】

アマサカ。

この小字は、土曾川が流れ落ちる傾斜地にある。

豊丘村にあるアマサカ小字と合わせて考えると、アマサカとは「下流の水田地帯に水を供給するための水源涵養林のある傾斜地」としたい。雨水を確保するための樹林傾斜地であらうか。

アカサカ小字も、また伊那谷南部の特徴的な地名かもしれない。全国地図には、中・大字として挙げられているアマサカ地名は二ヶ所にあるが、宛てられている字は「海士坂」と「尼坂」である。

【阿弥陀垣外】

アミダガイト。

この小字は、国道153号線と飯田線の間三ヶ所、国道の東側に一ヶ所の合計四ヶ所に分布する小さな小字群である。

アミダガイトとは「阿弥陀如来に関わる御堂などの建物があった所」と思われる。おそらくは阿弥陀堂があった所を意味するのであろう。しかし、この四ヶ所のそれぞれに阿弥陀堂であったのか、それともこの四ヶ所をつないだ大きな土地が阿弥陀堂という名称で呼ばれていたのかどうかは不明である。

元善光寺の本尊は阿弥陀如来であるというので、元善光寺に関わる小字名ではないかと、最初に考えたのであるが、元善光寺との距離がありすぎることが気になった。

延享年間(1744~1749)に松代の長國寺で収集した材料を写したものだといわれている『伊那郡神社佛閣記』には、座光寺原のところに「阿彌陀堂・十王堂・薬師堂」が記載されている。これがアミダガイト小字に関わる阿彌陀堂であることは確かであらう。十王堂や薬師堂と一緒にしているので、元善光寺とは独立した存在であったと思われる。

「平安中期以降、各地に阿弥陀堂が造営され、九品仏や来迎図、迎講なども行われ念仏聖の活躍と相まって浄土往生信仰や死霊供養に念仏諸宗派が日本仏教の主流を占めるに到り、善光寺信仰や百万遍念仏や踊念仏が流行して今日に至っている」(仏教民俗辞典)という。

しかし、アミダガイト地名は全国地図には載っていない。

【新井原】

アライバラ。

南大島川右岸の飯田工業高校のグラウンドとその付近に、大きなアライバラ小字があり、その周辺に三ヶ所、小さなアライバラ小字がある。かつては、この小字

な小字も含めた大きな面積をもっていたものと思われる。

アライバラとは何か。アライは「荒井」（語源辞典）で、「流路が定まらない暴れ川」を意味するのであろう。地名発生時には、堤防も無かったと思われるので、南大島川の流筋は大雨の度に変わっていたのであろうか。ハラ（原）は「平らで広く、多く草などが生えた土地。特に、耕作しない平地」（広辞苑）である。

以上から、アライバラとは「流路が定まらない暴れ川の氾濫原にある平地」を意味するのであろう。

全国地図には、アライバラ地名は、2ヶ所に中・大字として挙げられており、「荒井原」と「新井原」の字が宛てられている。

【荒田】

アラタ。

この小字は、講雲寺北西側に一ヶ所、麻績の館の北西側に一ヶ所の二ヶ所に分布し、いずれも南西端は谷川になっているが、現在は水田にはなっていない。

アラタとはアラタ（荒処）で「荒れる土地」をいうのであろう。タは「場所」を示す接尾語。大雨の度に谷川が暴れて岸を削ることがあったのであろう。

全国地図には、アラタ地名は41ヶ所も中・大字として挙げられており、うち34ヶ所は「荒田」の文字が宛てられている。

【安地原】

アンチバラ。

大堤保育園の周辺に大きなアンチバラ小字があり、その北西側と南東側に一つずつ小さなアンチバラ小字がある。この場合も、かつては一つながりの大きな面積をもった小字であったと思われる。現在は、ほとんどが果樹園と畑地になっている。

アンチバラとは何を意味するのか。ヤスチハラという呼び名であれば、痩せた土地をいうのであろうが、そういう名称ではない。ではアンチバラとは何を意味するのか。三説を挙げておきたい。

①アンチバラは「安置原」か。すなわち、アンチバラとは「神仏の像などをあがめすえた広い平坦地」（一部は国語大辞典）をいうのではないだろうか。しかし、これを証明するような痕跡はない。

②アンチバラ←アリチバラ←アラチバラと転訛した語。アラは動詞アラク（墾）から「新墾地」の意（語源辞典）で、チは「場所」を示す接尾語。以上から、アンチバラとは「新たに開墾した緩傾斜地」を意味する。

③あるいは、アラは副詞アリニ（斜）に通じ「斜面」をいう（語源辞典）。従って、アンチバラとは、単に「緩傾斜地」を意味するのかもしれない。

全国地図には、アンチバラ地名は無い。

【池田】

イケダ。

元善光寺駅の南側に広がる大きな小字である。

イケダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①イケダ（池田）とは「湧水を溜めた池を水源にした田んぼのあった所」か。近くにはシミズ小字もあり、自然の湧水があった所であろう。

②イケ（池）・ダ（処）で、イケダとは「湧水による池があった所」か。

全国地図には、イケダ地名が中・大字として96ヶ所にも挙げられており、うち92ヶ所が「池田」の字を宛てている。

【石川除上・石川除内・石川除先・石川除下・石川除前】

イカワヨケウエ・イカワヨケウチ・イカワヨケサキ・イカワヨケシタ・イカワ

ヨケマエ。

これらの小字は河原会所付近から下流側にかけて分布する。道路にそってイカワヨケ（石川除）の石堤があり、その周辺にある。

イカワヨケは天竜川に対処する石造りの堤防をいう。カワヨケ（川除）は聞き慣れない語であるが、「治水のために川岸・川中に設けられた施設」（広辞苑）をいう。

ウエ（上）は「上流側の土地」を、ウチ（内）は「内側の囲まれた土地」を、サキ（先）は「先端部の土地」を、シタ（下）は「下流側の土地」を、マエ（前）は「近い土地」を、それぞれ意味する。

石川除石堤は、文政11年（1828）～明治元年（1868）の間に築造され、江戸期の石堤の中で三六災害を乗り越えることができた唯一の堤防だという。

全国地図には、イカワヨケ地名もイシカワヨケ地名も記載は無いが、カワヨケ地名は6ヶ所にある。

【石行】

イシギョウ。

飯田工業高校入口道路の周辺に、三ヶ所ある。

イシギョウとは何か。これも難しい地名であるが、二説を挙げたい。

①イシギョウ（石経）で、「名号を刻んだ石碑とか石塔が建立されていた場所」（松崎岩夫）をいうのであろうか。現地には、そうした石碑はないが、かつてあったという可能性はある。

②イシギョウ（石行）で、ギョウは「長くつらなること。並び」（広辞苑）をいう。従って、イシギョウとは「石が流に沿って並んでいた所」を意味するか。南大島川の氾濫がひいた時に、小石が並んでいたことがあったのであろうか。

全国地図には、イシギョウ地名は中・

大字として3ヶ所に挙げられている。「石行」が2ヶ所に、「石経」が1ヶ所に宛てられている。

【石田・石田上】

イシダ・イシダウエ。

イシダ小字は土曾川左岸に二ヶ所あり、イシダウエ小字は南大島川右岸に一ヶ所ある。

イシダとは「小石まじりの土地（田んぼ）」を意味する。

イシダウエとは「小石まじりの場所から一段上の土地」をいうのであろう。南の方にあるイシダ小字とは距離が離れているので直接のかかわりはないように思える。

イシダ地名は、全国地図には80件も中・大字として挙げられていて、うち79件が「石田」の文字になっている。

【井下横】

イシタヨコ。

この小字は南大島川右岸に二ヶ所、左岸に一ヶ所ある。

南大島川右岸のイシタヨコ小字は県道飯島飯田線の北側にある。イは井（井）で、本沢井（大井）を指す。本沢井より下方にあり、井水と並行していることをヨコ（横）と表現している。つまり、ここでは、イシタヨコは「大井より低い所を大井と並行して横に延びている土地」を意味する。

南大島川のずっと下流にあるイシタヨコの井（井）は南大島川をいう。ここでは、イシタヨコとは、「南大島川より低い土地で流路とは少しはずれて横方向にあるところ」をいうのであろう。

【石塚・石塚下】

イシヅカ・イシヅカシタ。

座光寺公民館周辺にイシヅカ小字が二ヶ所、イシヅカシタ小字が一ヶ所あり、土曾川左岸と元善光寺駅の南方にイシヅ

カ小字が一ヶ所ずつある。

イシヅカとは「古墳がある場所」を意味する。現存する古墳は一つで、玄室を見ることができる円墳である。

イシヅカシタとは、「イシヅカ小字の下側の土地」をいうのであろう。

しかし、土曾川左岸のイシヅカは「耕作に差し障る石を拾い出して積み上げたところ」を意味するものと思われる。

全国地図には、イシヅカ地名は24ヶ所に中・大字として挙げられており、うち23ヶ所には「石塚」の字が宛てられている。

【石原】

イシハラ。

この小字は、土曾川左岸に一ヶ所、元善光寺駅東方の国道沿いに三ヶ所、飯田線の近くに一ヶ所ある。

イシハラ＝イシワラで、「小石の多くある平地」（広辞苑）をいう。

全国地図にはイシハラ地名は78ヶ所にも挙げられており、その全てに「石原」の字が宛てられている。

【石原田】

イシハラダ。

この小字は土曾川左岸と南大島川右岸の二ヶ所にある。

イシハラダとは、字面の通りで「小石まじりの田んぼ（土地）」である。谷川の岸は小石の多い土地になっていることが多い。

【石佛】

イシボトケ。

土曾川左岸にあり、近くには正泉寺小字が分布している。

石仏は「石で造った仏像」（広辞苑）である。従って、イシボトケとは「石で造った仏像が置かれていた場所」をいうのであろう。現在は、ここに石仏はないが、恐らくは、近くの正泉寺小字に移されて

いるものと思われる。

全国地図には、イシボトケ地名は19ヶ所に中・大字として挙げられており、うち18ヶ所に「石仏」の文字が宛てられている。

【壺丈藪】

イチジョウヤブ。

南大島川右岸にあり、フルイチバ小字にほぼ囲まれている。

イチジョウ（壺丈）は「中世に行なわれた地方的な地積の示し方。一反の1/5にあたる」（国語大辞典）という。壺丈は198.34㎡で、ほぼ14m×14mの面積である。

伊那谷南部には、藪下・藪越などの藪小字が多いように思える。このヤブは単なるヤブでは地名にはなりにくいので、何らかの意味を含んでいるのではないだろうか。それがヤブガミ（藪神）と思われる。神格が低い雑神であるが、祭場などが荒らされると疫病など激しい祟りを発現する祟り神とされる。荒神・地神・御子神など地主神的な性格が強い（以上は民俗大辞典）。

以上から、イチジョウヤブとは「荒らされることがなかった壺丈ばかりの面積の藪」ということになろうか。

全国地図の中・大字には、イチジョウヤブ地名は無い。

【市場・市場下】

これらの小字は、元善光寺駅の南西方向にあり、並木沢川の左岸にある。

イチバは「定期的に市が開かれていた場所」（民俗大辞典）であり、イチバシタとは、「市場が開かれていた場所の下側のところ」をいうのであろう。並木沢の河原で市が開かれていたようで、イチバ小字は、並木沢に沿って、その沿岸に細長く延びている。

また、麻績神社のまわりがイチバ小字

になっているのは、中世、寺社の門前で市がたったという、その名残であろうか。

全国地図には、イチバ地名が多くて、164ヶ所にも中・大字として記録されており、うち160ヶ所で「市場」の字が用いられている。

【稲場】

イナバ。

欠野の段丘の東側の斜面にある、小さな小字である。

イナバは、稲はぎが普及する前の稲干場をいう。座光寺には一ヶ所にしかないが、伊那谷南部には多い小字名である。全国地図には、イナバ地名は、32ヶ所に中・大字として挙げられており、宛てられている字は、「稲葉」23ヶ所、「稲場」8ヶ所となっている。

【稲荷坂】

イナリサカ。

この小字は、現在座光寺小学校になっている本城小字の南～北西の傾斜地に五ヶ所、分布している。

イナリザカとは「稲荷社へ詣でる坂道」であろうか。現在の稲荷社は麻績神社の境内にある。しかし、五ヶ所のイナリザカ小字の坂道を収束させれば、稲荷社は麻績神社より北方に位置せざるをえない。すなわち、現在の児童センターから耕雲寺付近に稲荷社があったのではないかと、思われるがどうであろうか。

伏見稲荷大社の分霊が様々な祈願目的によって全国各地に勧請された。民俗的稲荷神は山ノ神・野神・田の神・水神・竜神・祖霊神・御霊神・農耕神・福神・蚕神などの宗教的要因を表出して、人々の諸願を成就する神となって信仰を集めているという（民俗大辞典）。

全国地図には、イナリサ（ザ）カ地名は、中・大字として3ヶ所に挙げられている。

【井端】

イバタ。

天竜川の氾濫原にあり、西端を井水と思われる西の沢川が流れている。

イバタとは「井水の縁にある土地」をいう。西の沢川とは西の沢井のことと思われる。

全国地図には、イバタ地名もイハタ地名も記載は無い。

【入ノ田】

イリノタ。

南大島川右岸の氾濫原より一つ上の段丘にある。現在は、大部分が果樹園になっている。

イリノタとは「少し引っ込んだ所にある田んぼ」であろうか。“ひっこんだ所”にふさわしいのは、田んぼであり、処ではない。井水が上端を流れており、上流側には今でも水田になっている。

イリノタ地名もイリノダ地名も、全国地図には載っていない。

【入ノ洞】

イリノホラ。

この小字は、南大島川右岸の氾濫原にある。大きな池があって、浅い谷になっている。

イリは“入”ではなくて“冨”の可能性が高い。この位置では「引っ込んだ奥の所」とは言えそうもないからである。

つまり、イリ（冨）とは「水の出入りを調節できるように池などの堤に埋めた樋。水門」（国語大辞典）をいう。すなわち、イリノホラとは「水門のついた池のある洞」を意味するものと思われる。

全国地図には、イリノホラ地名は載っていない。

【上河原・中河原・下河原】

カミカワラ・ナカカワラ・シモカワラ。

カミカワラ小字は南大島川右岸にあり、天竜川を下って、下流側にナカカワラ小

字、さらにその下流側にシモカワラ小字がある。

カワラは「川辺の、水がなくて砂地の多い所」(広辞苑)をいう。

【上川原・下川原】

カミカワラ・シモカワラ。

字は呼び方によって決まる。となると、前の「河原」小字群との違いはないはずである。それでもなぜ、「河原」と「川原」があるのか、理由があるのかもしれない。小字図をよくみると、「川原」の方が天竜川寄りにあるようにみえるが、どうだろうか。偶然かもしれない。

【組田・グミ田・上組田】

クミダ・ウエクミダ。

これらの小字は西の沢川右岸にある。

クミダとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①クミは動詞クム(組)の連用形が名詞化した語で、「同じ目的、行為などのために仲間同士の関係になること」(国語大辞典)をいう。以上から、クミダとは「井水の維持管理費用捻出のために共同管理している田んぼ」のことであろうか。その井水は西ノ沢井をいうのであろう。

②クミは動詞クム(汲)の連用形が名詞化したもので、クミダハクミ(汲)・ダ(処)から、「水を汲み出すことが許されている場所」であろうか。やや曖昧な解釈かもしれない。

グミダはクミダが濁音化した語で、意味は同じ。

ウエクミダとは「クミダ小字の上流側にある土地」をいうのであろう。

全国地図には、クミダ地名は記載が無い。

【上野・上野垣外】

ウエノ・ウエノガイト。

これらの小字は「本城」小字のある丘陵の麓の緩傾斜地にある。

ウエノのウエ(上)は元善光寺のある段丘より上にあることを意味しているのであろう。ノは「自然の広い平地。多く、山すその傾斜地」(広辞苑)をいう。

以上から、ウエノとは「上の段丘の広い緩傾斜地」をいうか。

ウエノガイトは「ウエノ小字にある有力者の居住地跡」であろうか。

全国地図には、ウエノ地名は187ヶ所、ウエノガイト地名は3ヶ所に、中・大字として記載されている。

【上洞】

カミボラ。

土曾川左岸に張りつくようにして長く延びている小字である。

カミボラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①カミは動詞カム(噛)の連用形が名詞化した語で、「水などが岩や砂を激しくえぐる状態」をいう。従って、カミボラとは「(土曾)川が激しく岸をえぐっていた洞」をいうのであろうか。

②カミは「川の上流」をいう。すなわち、カミボラとは「谷川の上流にある洞」を意味するのかもしれない。

全国地図には、カミボラ地名は無いが、カミボラ地名は一ヶ所にだけ中・大字として記載があり、「上洞」の字が宛てられている。

【裏】

ウラ。

麻績の館のある平面の下方の北東側にある、小さな小字である。

ウラとは、「(麻績神社の参道からみて)裏側になっている場所」をいうのであろう。

全国地図には、ウラ地名は51ヶ所に中・大字として挙げられており、うち48ヶ所は「浦」の字が宛てられており、「裏」は2ヶ所にしかない。

【ウルシ沢】

ウルシザワ。

この小字は二ヶ所にあり、いずれも氾濫面と低位段丘面Ⅱの間の斜面にある。

ウルシザワとは「ウルシを栽培していた小さな洞」か、「ヤマウルシが自生していた小さな洞」をいうのであろう。

全国地図には、ウルシザワ地名が、9ヶ所、中・大字として挙げられており、うち8ヶ所は「漆沢」の字が宛てられている。

【檜畑】

ヒノキバタ。

この小字は、麻績神社参道の傍らで麻績の館の南側にある。

ヒノキバタとは何か。二説を挙げておきたい。

①ヒノキバタとは字面通りに考えれば、「目立つようなヒノキがあった畑」であるか。参拝者たちの目にとまったヒノキだったのかもしれない。

②ヒノキバタ←ヒノキハタと濁音化した語で、ヒ(樋)・ノ(助詞)・キハ(際)・タ(処)か。すなわち、ヒノキバタとは、「流水のほとり」を意味するのかもしれない。井水の流れているところにある。

全国地図には、ヒノキバタ地名もヒノキハタ地名も載っていない。

【扇田】

オウギダ。

飯田線の南側で、イチバシタ小字とグミダ小字の間にある。

オウギダといえば「地形が扇形になっているところ(田んぼ)」を意味する。ここのオウギダの形を判断するのは難しいが、北隣のイシハラ小字を含めると扇形の地形となる。小字発生当時は、このイシハラ小字まで含めた地域がオウギダ小字に含まれていたのではいかと判断したが、勇み足か。

全国地図には、オウギダ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられており、いずれも「扇田」の字を宛てている。

【大井】

オオイ。

高森境の南大島川に沿う細長い小字である。

オオイとは「大井」で本沢井をいう。座光寺の中心的な井水であった。南大島川から取り入れていた井水では、最上流部の取り入れ口のあるところか。

全国的にもオオイ地名は多く、全国地図には、中・大字として63ヶ所に挙げられている。

【大口】

オオグチ・オオクチ。

高森境にあつて南大島川に沿う小字で、三ヶ所にある。大井の取入口の下流側になる。これも井水に関わる小字名である。

オオイとは「大きな井水の取入口」をいうのであろう。

三つのオオグチ小字のうち、最も上流側にあるのは大口井の取水口で、最も下流側にあるのは日影田井の取水口と思われるが、その間のオオグチ小字がわからない。あるいは井水の外し場であったかもしれない。

全国地図には、オオグチ地名は10ヶ所に中・大字として記載があり、うち9ヶ所には「大口」の字が宛ててある。

【大久保】

オオクボ。

高森境の南大島川右岸にあり、広い小字になっている。北部山麓線と中央道の間にある。

オオクボとは「窪地もある広大な緩傾斜地」をいうのであろうか。

【大島川】

オオシマガワ。

この小字も、高森境の南大島川下流域

に、三ヶ所ある。うち二ヶ所は現在でも南大島川に接しているが、最も下流側にあるオオシマガワ小字は、現在の南大島川とは少し離れているが、地名発生時には、接していたのであろう。

現在、南大島川と呼んでいるのは、かつては大島川と名付けられていたことがわかる。

オオシマガワとは「かつての大島川に接していた土地」をいう。

なお、オオは美称で、大島川とは「島がある川」をいうのであろう。天竜川に近い下流域には、かつては島がいくつかあったと思われる。

全国地図には、オオシマガワ地名は5ヶ所にあつて、全てに「大島川」の字が宛てられている。

【大島渡】

オオシマド（ト）。

南大島川右岸で流路が南東向きから南向きに変わる地点に、この小字はある。

オオシマド（ト）は何か。二説を挙げる。

①ド（渡）は「沢や谷が合流する地点。どう」をいう。従って、オオシマドとは「大島川が天竜川に合流する所」をいう。今の南大島川である。合流点では川音がドウドウと一段と大きくなっていたのであろう。音響地名か。

②ト（渡）は「川や海を横切ってゆく。わたる」（国語大辞典）こと。すなわち、オオシマドとは「大島川を横切っていく渡し場のあるところ」をいうか。現在は、この小字内に二本の橋が架かっている。下流側は水量は多くなるが川幅が広がっているので、渡りやすいといわれている。

【大塚】

オオツカ。

この小字は、元善光寺駅に北側に二ヶ所あり、ほぼ繋がっている。

オオツカとは「大きな円墳のあったところ」である。現存はしていない。

オオツカ地名は、全国地図に中・大字として110ヶ所にも記載されている。うち104ヶ所に「大塚」の字が宛てられている。

【大橋】

オオハシ。

この小字は二ヶ所にある。南大島川右岸と土曾川左岸である。

オオハシとは「橋が架けられていた場所」であろう。オオは美称か。

土曾川のオオハシ小字は県道市場桜町線の近くにあり、現在も橋が架けられている。

南大島川のオオハシ小字には、現在、南大島川上橋が架けられている。

全国地図には、オオハシ地名は、中・大字として53ヶ所が挙げられている。

【大洞】

オオボラ。

この小字は土曾川左岸にあり、ソリダ小字に囲まれている。

オオボラ小字そのものは、大きな面積ではないが、周辺は大きなやや深い窪地になっている。

オオボラとは「周辺が大きな洞になっている土地」か。

全国地図には、オオボ（ホ）ラ地名が35ヶ所、中・大字として挙げられており、その全てに「大洞」の字が宛てられている。

【大宮田】

オオミヤダ。

飯田線の南側で並木沢川との間にある、小さな小字である。

オオは美称。ミヤダは「神社に所属し、その収穫で神供をととのえるための水田」（国語大辞典）をいう。ここでは麻績神社を示す。

全国地図には、オオミヤダ地名は1ヶ所に中・大字として挙げられているが、ミヤダ地名は20ヶ所になる。

【垣外・垣内】

カイト。

カイト小字は座光寺にも多く、6ヶ所にもなる。

カイトとは、「居住地」を意味する。この伊那谷南部のカイトもほぼこの意味で通るにではないだろうか。

【限畝町】

カギセマチ。

この小字は座光寺公民館の南隣にある。

カギセマチとは何を意味するのか。セマチ(狭町・畝町)は「中世、地籍の単位。畝と同じく一段の十分の一の地籍を示すこともあった」(国語大辞典)という。カギセマチとは何か。二説を挙げる。

①カギは鍵型の地形をいうか。従って、カギセマチとは「鍵型になっていた耕作地の一画」をいうか。現在の小字が鍵型とするのは難しいが、小字発生時にはもう少し広がったとすれば、成立すると期待したい。

②カギ←カキ(垣)と濁音化した語で、カギセマチとは、「垣で囲われたようになっていた一区画」をいうか。麻績神社境内と思われるので、そうした囲いがあったかもしれない。

全国地図には、カギセマチ地名は載っていない。

【角田】

カクダ。

この小字は、国道153号線と県道上飯田線の交差点周辺になっている。

カクダとは何をいうのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カクは動詞カクム(囲)の語幹で、「(なにかに)囲まれた地」をいう。つまり、カクダとは「流水に囲まれた所(田んぼ)」

をいう。並木沢川と井水によって、ほぼ二方向を囲まれている。

②カクはカハ(川)・ク(処)が転じたもの。従って、カクダとは「川の近くにある田んぼ(土地)」を意味するか。

全国地図には、カクダ地名は2ヶ所に中・大字として記載があるだけ。

【欠・欠ノ前・欠野垣外・欠野・欠野沢・欠ノ下・欠ノ澤・欠ノ澤上・欠ノ沢上・欠田】

カケ・カケノマエ・カケノサワ・カケノサワシタ・カケノシタ・カケノサワウエ・カケダ。

関係小字は十五ヶ所に分布する。カケ小字群である。ほとんどは天竜川の氾濫面と低位段丘面Ⅱとの間の傾斜地付近にあるが、一ヶ所、カケダ小字だけは少し離れていて国道153号線の近くにある。

カケは動詞カク(欠)の連用形が名詞化した語で、「崩れ地」をいう。

カケダは「崩れ地のある田んぼ」で最上端を並木沢川が流れている。

カケノは「崩れ地のある平坦部」であろうか。カケノマエ小字とカケノシタ小字は、天竜川氾濫面にある。

全国地図には、カケ地名は19ヶ所に中・大字として記載があり、うち3ヶ所に「欠」、8ヶ所に「掛」の字が宛てられている。

【鍛冶作】

カジサク。

この小字は飯田線の南東側、並木沢川と西の沢川の間にある。

カジサクとは何か。二説を挙げる。

①カジサクとは、字面の通りで「鍛冶職人の耕作地」であろうか。

②サクには関東地方の方言で、「窪くて長く平らな所」という意味もある(語源辞典)。緩傾斜地でわずかな窪みがあるかもしれない。細長い土地になっている。以

上から、カジサクとは、「鍛冶職人が住んでいた細長い土地」となる。鍛冶は「金属を打ちきたえて種々の器物を作ること。また、それを業とする人」（広辞苑）であるが、農具にも鉄器が使われており、特に寺社からは釘の需要が多かったという。

全国地図にはカジサク地名は記載がない。

【佳治屋】

カジヤ。

この小字は南大島川に近い北部にあり、フルイチバ、シャグジ、トヤバなどの小字に囲まれている。

カジヤは「鍛冶屋」であろう。鍛冶職などの職人は、中世、多くは平民百姓の負担する課役は免除され、しばしば荘園・公領に給免田畠を与えられていたという。

全国地図でカジヤ地名が中・大字として挙げられているのは82ヶ所にのぼる。

【風伐】

カゼキリ。

この小字は、麻績神社の西側の山地にある。

カゼキリは風祭の神事をいうのであろう。諏訪神社系のお宮では、風上に草鎌を向けるなどの神事がある。二百十日の前などに風除けを祈願するのであるが、どのようにして風祭を行ったのかは未確認。

全国地図には、カゼキリ地名は載っていない。

【門田】

カドダ。

天竜川氾濫原の上の段である、低位段丘面Ⅱにある。

カドダ←カドタと濁音化した語で、カドタとは「門の前にある田」をいう（広辞苑）。この門のある家は有力者の居住地であろう。単に「屋敷地の近くで耕作に便利なところから重視された」（広辞苑）

だけでは小字にはなりにくい。

全国地図には、カドダ地名は記載がない。

【金井戸】

カナイド。

土曾川下流域沿いの左岸にある。上郷境に、大きな小字一ヶ所と小さな小字が二ヶ所にある。

カナイドとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①カナ←カネ（矩）と転じたもので、「真直ぐ」の意。イドは井（井）・ド（処）で、「流水のあるところ」をいう。以上から、カナイドとは「真っ直ぐに流れている川のある所」であろうか。この小字の付近、土曾川はほぼ直線状に流れている。

②カナは語源である「カク（搔）・ナグ（薙）」と同じで、「崩れ地」を意味する。すなわち、カナイドとは「川が流れていて崩れ地のあるところ」をいうのかもしれない。

カナイド地名は、全国地図の中・大字に1ヶ所記載されており、「金井戸」の字が宛てられている。

【金井原】

カナイバラ。

この小字は、座光寺小学校のあるホンジョウ小字の南東向き斜面に広がっている。

カナイバラとは何か。二説を挙げたい。

①カナ←カク（搔）・ナグ（薙）と転じたもので「崩れ地」をいう。バラ←ハラ（腹）と濁音化した語で、「山の中腹」をいう。以上から、カナイバラとは「崩れ地のある川が流れている山の中腹部」をいうか。この小字の南西端を欠野沢川の急流が流れており、崩壊地も少なくなかったと思われる。

②カナは「焼畑」を意味する（語源辞典）。すなわち、カナイバラとは、「流水があり、焼畑耕作が行われた山の中腹部」である

うか。ホンジョウとの関わりが気になるが、城があった頃よりも後にカナイバラ小字が生まれたのであろうか。

全国地図には、カナイバラ地名は1ヶ所が中・大字として挙げられている。

【蟹ヶ城】

ガニガジョウ。

天竜川氾濫原の一つ上の段丘の天竜川に向かった先端部にある。

ガニガジョウとは何をいうのであろうか。ジョウは「条里制」か「城社」のどちらかであるが、条里制は難しいので城社であろうと判断した。ガニはカネ(矩)が転じた語で「直角」をいう(語源辞典)。

以上から、ガニガジョウとは「敷地が直角の崖に囲まれたようになっている城社」であろうか。南側にあるフルジョウ(古城)小字にも支城があったのであろうか。さらにガニガジョウ小字の隣にあるシラヤマ(白山)はシロヤマ(城山)が転訛したものである可能性はないでもない。

全国地図には、ガニガジョウ地名は載っていない。

【蟹澤】

カニサワ。

この小字は、天竜川氾濫原の上郷境に近いところであって、国道のバイパス代わりに使っている道路沿いにある。

金井戸井が分流している場所で、分流した井水が直角に曲がっている。

カニサワとは何か。二説を挙げたい。

①カニサワとは、字面通りで「カニがたくさんいる井」ということになるが、どうであろうか。

②カニサワとは「直角に曲がっている井水のあるところ」と考えることもできる。前にも触れたように、カニはカネ(矩)が転訛したもので「直角」をいう。ただ、カニサワ地名が発生した時に、井水が現

在のようであったかどうか、懸念はある。

全国地図には、カニサワ地名が25ヶ所に中・大字として挙げられており、うち24ヶ所に「蟹沢」の字が用いられている。

【上林】

カミバヤシ。

この小字は中央道の東側にあり、座光寺PAに近い。中を大井(本沢井)が流れている。

カミバヤシとは何か。二説を挙げたい。

①「井水の上流側にある樹木の群がり生えた所」であろうか。

②カミはカミ(神)で「神聖な地」をいうか。秋葉大権現をはじめ、如意輪観音・聖観音・馬頭観音などの石碑がある。カミバヤシとは「神聖な地で樹木が繁っていたところ」をいうのであろうか。

全国地図には、カミバヤシ地名が1ヶ所、カンバヤシ地名が13ヶ所、中・大字として記録されている。

【唐澤(沢)】

カラサワ。

ニシノサワ小字の下流側に、この小字はある。現在は、大井(本沢井)から分流した西の沢井と唐沢井が同じ谷を流れている。

カラサワとは何か。二説を挙げておきたい。

①カラサワ(涸沢)か。つまり、カラサワとは「水の乏しい沢」だったかもしれない。現在、井水が通っていることを考えると、水が必要であったのであろう。

②カラ←ガラで「小石の多い土地」をいう(国語大辞典)。従って、カラサワとは「小石の多い沢」となる。下流側の緩傾斜地になっているので、大きな石は流れてこないであろう。

全国地図には、カラサワ地名は、56ヶ所に中・大字として記載がある。

【荊分】

カリワケ。

土曾川に近いところに4ヶ所ある。

カリワケとは刈分小作の略で、日葡辞書にもカリワケがあるという（広辞苑）。刈分小作というのは「小作地の収穫物を一定割合で地主取分と小作取分に分け、地主取分を小作料として収納する小作形態」（民俗大辞典）であるという。豊凶が自然条件に左右されやすい水害常習地に多くみられ、小作も地主への従属度が高い小作形態であったらしい。上に方には西の沢川があり、下には土曾川が流れている土地で、水害もあったのかもしれない。

全国地図には、なぜかカリワケ地名は記載が無い。

【川原林】

カワラバヤシ。

南大島川がかって天竜川に合流していた両河川の氾濫原にある。オオシマド小字の山側になる。

カワラバヤシとは、字面の通りで「氾濫原にある樹木の群がり生えた所」をいうのであろう。

全国地図には、カワラバヤシ地名も、なぜか記載が無い。

【観音上】

カンノンウエ。

この小字内には小原新堤があり、大井（本沢井）が中を流れており、周辺にはシミズシタ・スナダ・コテラゴなどの小字がある。

カンノンウエとは、「観音像が安置されていた御堂があった上流側の場所」をいう。

観音堂はこの小字に下流側にあるフルイチバ（古市場）小字にあって、寛文六年（1666）の検地帳にある「かんのん」地名のあった場所でもあるのだろう。現

在はフルイチバ小字内にある万才生活センターに安置されている十一面観音菩薩像のことを指しているものと思われる（私たちのふるさと座光寺）。

観音は阿弥陀如来の脇侍で、観音の総体は聖観音で、千手・十一面・如意輪・准胝・馬頭・不空羂索が独立したそれぞれの信仰をもつ。

全国地図に、カンノンウエ地名は無いが、カンノン地名は9ヶ所に中・大字として記載されている。

【観音原】

カンノンバラ。

中央道に架かる大門橋付近にある細長い小字で、扇状地の緩傾斜地にある。

カンノンバラとは、「観音様を安置していた野原」であろうか。この小字の南端付近に聖観音の石仏がある。宝永五年（1708）の年号が入っているという（飯田市の石造文化財）。

全国地図には、カンノンバラ地名も記載がない。

【北沢（澤）】

キタザワ。

これらの小字は、高森境の南大島川沿岸に並んでいる。

キタザワとは、字面の通りで「北の方を流れている川」をいう。

全国地図には、キタザワ地名は48ヶ所に中・大字として挙げられており、うち47ヶ所には「北沢」の字が宛てられている。

【棚田・北棚田・南棚田】

タナダ・キタタナダ・ミナミタナダ。

キタタナダは二ヶ所にあり「北の方にある棚田」で、ミナミタナダは一ヶ所にあり「南の方にある棚田」であろう。

タナダ小字は七ヶ所にあり、タナダとは「急な傾斜を耕して階段状に作った田」（広辞苑）であるが、中には水田にな

りそうにもない傾斜地もあり、その場合はタナ(棚)・ダ(処)で「斜面を階段状に作った土地」か。畑にすることもあったのではないかと思われる。

【知久方】

チクガタ。

この小字は土曾川の近くで、西の沢川と唐沢井の間にある。

チクガタとは何か。二説を挙げておきたい。

①チクガタとは「知久氏の方」で、「知久氏の領地だった所」をいうのであろうか。もっと広い土地であったが、知久氏が退いた後に、次第にチクガタの地域が違った名前の小字に分けられていって、ここだけ残ったと考えることもできる。

②チク←ツキと転訛したもので、ツキは動詞ツク(漬)の連用形が名詞化した語。カタ(方)は「場所」をいう(以上は語源辞典)。以上から、チクガタとは「水の漬きやすい場所」となる。西の沢井の唐沢井に挟まれており、土曾川に近いとはいえ、やや無理気味か。

全国地図にはチクガタ地名は記載が無い。

【並木・並木上・並木下】

ナミキ・ナミキウエ・ナミキシタ。

ナミキ小字は一ヶ所、ナミキウエ小字が四ヶ所、ナミキシタ小字が六ヶ所に分布している。

ナミキとは何を意味するのか。ナミはナメ(滑)の転訛した語で「緩傾斜地」を意味する。キはカ、コ、クと転じて r 用いられる「処」という語と同じ語源(以上は語源辞典)。

ナミキとは、「緩やかな傾斜地になっている所」をいうのであろう。

ナミキウエは、「緩傾斜地の下流側の地」をいい、ナミキシタは、「緩傾斜地の上流側の地」をいうものと思われる。

全国地図には、ナミキウエ地名もナミキシタ地名も無いが、ナミキ地名は28ヶ所で中・大字として挙げられている。

【並木原】

ナミキハラ。

この小字は南大島川に近くにあつてナミキウエ小字にほぼ囲まれている。

緩傾斜地と下向きの急斜面を含めた辺りを人体の腹に見立てたのであろうか。ナミキハラとは、「緩傾斜地とその下方の下向きの急傾斜地を一部含む土地」をいうのではないだろうか。

全国地図には、なぜかナミキハラ地名は記載されていない。

【中並木・中並木下】

ナカナミキ・ナカナミキシタ。

これらの小字は大堤団地の西側にかたまっている。ナカナミキ小字が四ヶ所、ナカナミキシタ小字が二ヶ所にある。

ナカナミキとは、「広い扇状地である緩傾斜地の中心部分にある土地」をいい、ナカナミキシタとは、「ナカナミキ小字よりも下流側にある土地」をいうのであろう。

全国地図には、ナカナミキ地名は挙げられていない。

【北並木・北並木上】

キタナミキ・キタナミキウエ。

キタナミキ小字とキタナミキウエ小字が一ヶ所ずつ、南大島川の近くにある。ナカナミキ小字の名称と位置が決まってから名付けられた小字と思える。南並木がないこと、北関係小字が少ないことなどから考えられないであろうか。

むろんキタナミキ地名は、全国地図には載っていない。

【中原】

ナカハラ。

北部にあるナカハラは小さな小字で六ヶ所に分布している。

ナカハラとは何か。北原－中原－南原とあるので、北と南の間のナカ（中）にしたいところであるが、ナカハラ小字は北に偏っている。

ナカは「井水と井水の間にある」ことをいうのかもしれない。すなわち、ナカハラとは、「井水と井水の間にある開墾地」としておきたい。

なお、全国地図には、ナカハラ地名は125ヶ所も中・大字として挙げられている。

【北原】

キタハラ。

この小字は三ヶ所にあるが、いずれも北部の南大島川の近くにある。

キタハラとは「北の方にある開墾地」であろうか。

全国地図には、中・大字として、キタハラ地名が、91ヶ所に挙げられている。

【南原】

ミナミハラ。

この小字は中央道のすぐ東側にあり、中央道に架かる大門橋陸橋付近にある大きな小字になっている。

ミナミハラとは何か。二説を挙げておきたい。

①ミナミハラとは文字通り、「南の方にある広い開墾地」をいうのであろうか。

②ミナミはミ（水）・ナ（助詞）・ミ（廻）で「川が屈曲しているところ」（語源辞典）を意味することも考えられる。従って、ミナミハラとは「近くを流れる川が屈曲している開墾地」ともいえそうだ。土曾川が山地から緩傾斜地へ抜ける直前で曲がっている。

全国地図には、ミナミハラ地名は42ヶ所に中・大字として挙げられている。

【本城・北本城】

ホンジョウ・キタホンジョウ。

ホンジョウ小字は二ヶ所にあつて、そ

れが北本城と南本城になっており、北本城のホンジョウ小字のまわりに二ヶ所のキタホンジョウ小字がある。

北本城には現在、座光寺小学校があり、南本城は古賀比神社を含めたその西側の一帯である。

いずれも座光寺氏の城といわれている。

全国地図には、ホンジョウ地名は中・大字として53ヶ所に挙げられており、うち22ヶ所に「本城」の字が宛てられている。

【喜内田】

キナイダ。

南大島川左岸の氾濫原にある棚田である。

キナイ（喜内）は固有名詞で、キナイダとは「喜内が所有する、あるいは耕作していた田んぼ」をいうのであろう。

当然のことながら、全国地図には、キナイダ地名は載っていない。

【口明塚】

クチアケヅカ。

土曾川左岸の氾濫原より一つ上の段丘にある。五ヶ所に分布しているが、かつては一つながりの小字であったと思われる。

口明塚というのはナギジリ1号古墳のこと（村史）。現在はナギジリ小字内にあるが、過去には、クチアケヅカ小字になっていたことがあるのであろう。口明塚は径9mほどの円墳で、現在でも石室の一部は残っているという。

クチアケヅカとは、字面の通りで「石室への入口が開いていた塚」を意味するのであろう。アケには「朱色」の意もあるが、入口に朱を塗ってあったとは考えられない。

全国地図には、クチアケヅカ地名は載っていない。

【久保】

クボ。

この小字は、北部を中心にして六ヶ所に分布している。

クボとは、「やや低くなっている土地」で、緩傾斜地の浅い洞になっているところが多い。

全国地図には、なんと265ヶ所でクボ地名が、中・大字として記録されている。

【久保田】

クボタ。

この小字は、低位段丘Ⅱの中心にして五ヶ所に分布している。

クボタも文字通りで「やや低い所にある土地（水田）」をいうのであろう。

クボタ地名も81ヶ所と多くが全国地図の中・大字として記載されている。

【倉垣外】

クラガイト。

国道153号線のカーブの内側、恒川遺跡群の地籍図では恒川B地籍の二ヶ所ある。

くら（倉・藏）は「穀物・商品・家財などを火災・水質・盗難などから守り、保管・貯蔵するための建物。倉庫」（広辞苑）をいう。

従って、クラガイトとは「倉庫があった場所」をいうのであろう。

炭化した干し飯や雑穀の塊が出土した場所は、このクラガイト小字のやや北側のところだという。

全国地図には、クラガイト地名もクラカイト地名も挙げられていない。

【土栗羽場】

ドクリハバ。

共和農業生活改善施設のすぐ近くにある小さな小字である。

ドクリハバとは何をいうのだろうか。よくわからない小字である。わからないながらも二説を挙げておきたい。

①ド←トと清音化したもにて、トは特に意味の無い接頭語（語源辞典）で、クリは「石。特に小石をいう」（国語大辞典）。ハバは「傾斜地」であろう。以上から、トクリハバとは「小石の多い傾斜地」をいうか。どこにでもありそうな土地になるから、無難かもしれない。

②ト←アトの上略形で、「田の余り水を次の田へ流すため畦に設けた切り口」（語源辞典）で、諏訪の方言であるという。クリは動詞クル（刳）の連用形が名詞化した語で、「穿つこと」か。以上から、トグリハバとは、「余り水を他に回すために畦にえぐった切り口のある傾斜地」という解釈は成立しないだろうか。

当然のことながら、全国地図には、ドクリハバ地名は無い。

【桑田】

クワタ。

低位段丘面Ⅱにあつて、県道上飯田線の少し南側にある、小さな小字である。

クワタとは何か。二説を挙げる。

①クワタ（桑田）は「桑を植えてある畑」をいう（国語大辞典）。つまりクワタとは「桑畑であったところ」を意味する。

②念のために、解釈をもう一つ。クワはキハ（際）の転で、「きわ。そば」のこと（語源辞典）。従って、クワタとは、「桑畑の傍の土地」かもしれない。語順が逆になっているのが気にかかるが。

全国地図には、クワタ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられている。

【毛勝田】

ケガチダ。

伊那南部広域農道が西の沢川を渡る付近にある小字で、西の沢川左岸の傾斜地と尾根部分にある。

ケガチダとは何を意味しているのか。ケガチ（飢渴）＝ケカツ（飢渴）で、「飢饉になること」（国語大辞典）であるとい

う。ダは現在、この小字内のどこにも水田はないので、ダ(処)であろう。

以上から、ケガチダとは「飢饉のときに必要な場所」ということになる。つまり、この小字にはヒガンバナなどの救荒植物が栽培されていたのかもしれない。あるいは飢饉用に準備された穀物倉でもあったのであろうか。

全国地図にはケガチダ地名は記載されていない。

【幸神】

コウジン。

コウジン小字は二ヶ所にある。一つは高森境に近いところ、もう一つは飯田線の元善光寺駅の南の方にある踏切付近にある。

コウジンはコウジン(荒神)であろう。すなわち、コウジンとは「荒神様が祀られていた場所」であろうか。

家や地域共同でまつられ、崇りやすい荒ぶる性格とともに祭祀者を庇護する強い力を持つ神。この場合は、屋内で祀る内荒神に対する外荒神で、屋敷神・同族神・集落神社など屋外で祀られる。祭場の破損や祭祀の怠慢に対して行為者の疾病を引き起こし、激しく崇るとされるなど地主神的性格を持つとされている(民俗大辞典)。

全国地図には、コウジン地名は10ヶ所に採られており、うち7ヶ所に「荒神」、1ヶ所に「幸神」の字が宛てられている。

【ゴキノメン】

この小字は国道153号線と県道上飯田線の交差点の南の方にある。

ゴキ(御器)←ゴウキ(合器)と転じたもので、ゴウキは蓋付きの木製の椀をいう。冠婚葬祭など特別の行事があるときに用いられたらしい。木地屋が全国的に展開して木製の椀が普及するようになったともいう。(以上は民俗大辞典)

メン(免)は「中世から江戸時代初頭までは、免除する意味で用いたが、1600年前後を画期として、領主取り分(年貢)の率を指す用法に逆転した」(岩波日本史辞典)という。座光寺のメンは免田のことをいうのであろう。すなわち、「荘園・国衙領において官物・年貢あるいは臨時雑役・公事を免除された田」(岩波日本史辞典)である。

以上から、ゴキノメンとは「御器製造の職人に与えられた免田であったところ」と思われる。

全国地図には、ゴキノメン地名が一つもないのが気になる。

【権現坂】

ゴンゲンザカ。

J A座光寺支所付近にある小字である。ゴンゲンザカとは「権現を祀る場に通じる坂道」であろう。

権現は仏・菩薩が日本の衆生を救うために権(かり)に神の姿をとって洗われた存在で、平安中期よりみられ八幡大権現・熊野権現・蔵王権現・白山権現という呼称が普及した。しかし1868年(明治元年)の神仏分離令によって社での権現号の使用は禁止。(以上は民俗大辞典)。こうして、麻績神社にあった八幡宮は明治初年になくなっている。

座光寺の権現はどこに祀られていたのか。これがはっきりしない。麻績神社は離れすぎていて、ここのゴンゲンザカの上の方にあったとは思われない。

権現祭祀地は、現在、白山大神・秋葉大神・琴平大神の石碑が残っているという旧宗安院の可能性が高い。いずれも権現号が与えられていた神々である。

【古城・古城下】

フルジョウ・フルジョウシタ。

これらの小字は、傾斜地を挟んで天竜川氾濫原とその上の段丘に跨がっている。

フルジョウシタは「フルジョウ小字の下側の土地」をいう。

フルジョウは字面の通りで「古い城塞があった所」であろう。天竜川対岸の知久氏を意識して築いた城であろうか。

フルジョウには「古くなったところ」の意味もあるが、何が古くなっているのかわからないので、ここでは採らない。

全国地図の中・大字には、フルジョウ地名が12ヶ所にあり、その全てに「古城」の字が宛てられており、さらにコジョウ地名は23ヶ所にあつて、うち17ヶ所に「古城」の字が宛てられている。

【小高・小高屋敷】

コタカ・コタカヤシキ。

これらの小字は、麻績の館の北東隣にある。

コタカとは何を意味するのか、国語大辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①コタカとは小高檀紙の略で、判の小さな檀紙でマユミの樹皮で作られた上質な紙をいう。マユミは日本各地の山野に生えるニシキギ属の落葉低木。以上から、コタカとは「小高檀紙という和紙を漉いている所」であり、コタカヤシキは「和紙製造者をまとめる有力者の居住地であったところ」であろうか。

②コタカ←コダカと清音化した語で、「わずかな田地をもっていること」を意味する。つまり、コタカとは「禄高の少ない武士」をいうのかもしれない。禄高は少ないといっても武士なので、その住処を「小高屋敷」といったのであろう。

③コタカはコタカ（小鷹）か。小鷹とは鷹狩りに用いるタカ類のうちハイタカなど小形のものをいう。すなわち、コタカとは「小形の鷹を飼育・訓練する場」をいうのであろうか。コタカヤシキは「鷹狩りに関わった有力者の住んでいた所」か。

全国地図には、コタカ地名は4ヶ所に中・大字として挙げられており、うち3ヶ所には「小高」の字が宛てられている。

【小島田】

コシマダ。

この小字は、県道上飯田線の南方で西の沢川左岸の沿岸にある。

コシマダとは何か。コ（小）は、「ほとんど意味を持たない接頭語」（語源辞典）で、シマダは「川に臨んだ州のような土地」であろうか。ほぼ二方向を流水に囲まれている所をシマ（島）に見立てたものであろう。

以上から、コシマダはそのまま「川に臨んで州のようになっている土地」としておきたい。

全国地図には、1ヶ所にだけコシマダ地名があり、「小島田」の字が宛てられている。

【古瀬・古瀬平】

コセ・コセダイラ。

これらの小字は、ゴンゲンザカ小字の北東隣にあつて、JR 飯田線の北側にある。コセ小字が2ヶ所、コセダイラ小字が1ヶ所となっている。

コセは「長野県の一部で、一方が山側になった道をいう」とある（国語大辞典）。この“長野県の一部”が気になるが、「コセは信州東筑摩郡にも在る」と分類山村語彙にはある。そこには大和の巨勢などもこれである、と付け加えている。当然、伊那谷南部でもコセは「一方が山側になった道」とするのが最も適当と判断できる場合が多い。

従って、コセとは「一方が山側になっている道のある所」を意味する。

タイラは「山中にある平らな所」をいう（国語大辞典）。静岡県磐田郡や奈良県吉野郡の方言だという。

すなわち、コセダイラとは「コセの近

くにある、山中の平らなところ」を意味する。

全国地図には、コセダイラ地名は載っていないが、コセ地名は17ヶ所に中・大字として記載されている。

【五反田】

ゴタンダ。

JR 飯田線に沿っており、元善光寺駅に近いところにある。現在は果樹園・畑・水田・住宅地になっている。

ゴタンダは面積を表していると思われる。すなわち、ゴタンダとは「面積が五反歩あった土地」をいうのであろう。実面積は名目の半分よりは大きいですが、かつてはもっと広い小字であったのかもしれない。

全国地図には、ゴタンダ地名は65ヶ所に中・大字として挙げられている。

【小寺子】

コテラゴ。

耕雲寺北側で伊那南部広域農道を跨いだ小字で、大きなのと、小さなのが2ヶ所にあるが、かつてはひとつながりになっていたものと思われる。

コテラコとは何か。テラ（寺）があったのであれば、問題はなくなるが痕跡はみえないようで、難しい地名になっているが、語源辞典等に依りながら三説を挙げておきたい。

①コ（小）は「ほとんど意味を持たない接頭語」、テラはタヒラ（平）の転訛した語で「緩傾斜地」をいい、ゴ＝コでコ（子）はコウ（川）から「川」をいう。以上から、コテラコとは「流水の傍で、緩い傾斜地になっている所」をいうのであろうか。小字の南西端を半ノ木井が流れている。

②ゴ＝コ（子）はコ（処）で、「場所」を示す接尾語。すなわち、コテラコとは「緩く傾斜している土地」であろうか。

③テラゴ＝テラコ（寺子）は「寺子屋の略」（国語大辞典）だという。もしかしたら、コテラコとは「小さな寺子屋があった所」かもしれない。耕雲寺は近い。寺が開いていた文字通りの寺子屋があってもおかしくはない。

全国地図には、コテラゴ地名は載っていない。

【小洞・小洞口】

コボラ・コボラグチ。

これらの小字は土曾川左岸の上郷境近くにある。コボラ小字は大きな面積を有し、コボラグチ小字はコボラ小字に含まれている。これらの小字はあちこちに崩壊地形があり、ナギジリ小字に開口している。

コボラのコはカハ（川）から転じたもので（語源辞典）、コボラとは「川のある洞」であろう。今でも崩壊地形が明瞭で、堰堤がいくつも造られている。谷川を意識した命名と思われるがどうであろうか。

コボラグチとは「コボラ小字が外部に開いている所」か。

全国地図には、コボラ地名は4ヶ所で中・大字として挙げられている。宛てられている字は全て「小洞」である。

【米ノ原北・米野原南】

コメノハラキタ・コメノハラミナミ。

コメノハラミナミ小字は土曾川右岸の上郷境にあり、広い面積をもっている。中央道がこの小字のなかを通っている。コメノハラキタ小字はコメノハラミナミ小字の北隣に2ヶ所ある。現在は大部分が果樹園になっている。

コメノハラとは何を意味するのか。水利や地形からみて米を生産していたところではないだろう。好字である「米」に書き換えたのであろう。そこで、主に語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①コメはカハ（川）・メ（辺）で、「川の

あたり」をいう。ハラはハラ（腹）で、「山の頂と麓の中間部分の広いところ」をいうか。以上から、コメノハラとは「谷川が近くを流れている山腹に当たる広い土地」をいうのであろうか。

②コメ←コム（込）の転訛した語で、「牛か馬を追い込んだ所」をいうのかもしれない。すなわち、「牧場があった広い山地」をいうのかもしれない。

コメノハラミナミは「南側のコメノハラ」であり、コメノハラキタは「北側のコメノハラ」ということになる。

全国地図には、コメノハラ地名は1ヶ所にだけ中・大字として記載されている。

【五郎田】

ゴロダ。

上郷境の土曾川左岸の沿岸に在る。

ゴロタとは何をいうのか。二説を挙げておきたい。

①ゴロタとは方言で、名古屋では「石。小石」を、吉野では「石の多い土地」をいう。川路にもゴロジマ（五郎島）があり、「石がごろごろしている州」をいう。以上から、ゴロダとは「石の多い土地」をいうのであろう。ダはダ（処）である。土曾川沿岸だから、石が多いのであろう。②あるいはゴロは固有名詞であったかもしれない。であれば、ゴロダとは「五郎の所有している土地」となる。

全国地図にはゴロダ地名は無い。

【恒川】

ゴンガ。

国道153号線周辺の三ヶ所に分布している。

いうまでもなく、ゴンガ←ゲンガ（郡衙）と転訛した語で、古代伊那郡衙のあった所をいう。

語の転訛が激しいためかどうか、全国地図にはゴンガ地名は一つも記載がない。

【最見塚】

サイミヅカ。

国道153号線と県道上飯田線と欠野沢川に囲まれた土地の中にある。

サイミヅカとは何を意味しているのか。古くから座光寺では最後塚と呼ばれ、武田氏伊那侵攻のおりに討死した人を埋めたのがこの塚であると伝承されている（村史）。

改めてサイミヅカとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①サイはサ（語調をととのえる接頭語）・キ（井）で「水のある所」をいい、ミはミ（廻）で「屈曲した地形」をいう。以上から、サイミヅカとは「流水も屈曲して流れていて古墳のあるところ」を意味するか。欠野沢川ともう一本の井水があり、いずれも屈曲している。

②サイ←サキ（崎）と転じた語で、「段丘端」をいい、ミは接尾語で「辺」が転じた語。以上から、サイミヅカとは「段丘端の辺りで古墳のあるところ」をいう。

また、ミを動詞ミル（見）の連用形が名詞化して語として、物見に利用された古墳とも考えたが、無理気味なのでここでは下ろすことにした。

全国地図には、サイミヅカ地名は記載が無い。

【サガリ】

南大島川氾濫原の一つ上の段丘上にある。

サガリは「上から下へ、または前から後へ位置のかわること」（国語大辞典）から、「傾斜地」を意味するものと思われる。

伊那谷南部でも数ヶ所にサガリ小字があるが、全国地図には8ヶ所に中・大字として挙げられている。

【里畑】

サトバタ。

この小字は国道153号線の東側にあり、カニガジョウ小字の北隣に当たる。

サトバタとは何か。国語大辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①サトとは「人の住まない山間に対して、人の住んでいる所」をいう。従って、アトバタとは「近くに人の住んでいる畑」をいうのであろうか。

②サトには「自分が住んでいたことのある土地」の意もある。サトバタとは「自分が住んでいたことのある土地にある畑」である。小字発生の動機はこういうことであったが、時間の経過とともに小字名だけが一人歩きしていたものと思われる。

全国地図には、サトバタ地名の掲載は無い。

【佐野】

サノ。

この小字は南大島川右岸の沿岸にある。大きな小字一ヶ所、小さな小字が二ヶ所にある。

サノとは「狭い野。田畑の間にある狭い野原」(国語大辞典)であるという。しかし、この解釈が当てはまるのは小さい小字である。

大きな小字の場合は、サは単なる接頭語で、サノとは「田畑のある広い平らな地」であろうか。

全国地図には、サノ地名は81ヶ所に中・大字として挙げられており、うち、80ヶ所には「佐野」の字が宛てられている。

【澤・沢・沢上】

サワ・サウエ。

サワ小字は、土曾川沿岸に一ヶ所、欠野沢沿岸に四ヶ所ある。

サワとは「山間の比較的小さな谷川」(広辞苑)をいう。

従って、土曾川沿いのサワは「土曾川」とも思えるが、実は「中井」の可能性も高い。欠野沢沿いのサワは「欠野沢」のことをいう。

サウエ小字は、欠野沢サワ小字群よりも下流側にある。欠野沢左岸にあって「欠野沢よりやや上方になる土地」をいうのであろう。

全国地図には、サワ地名は81ヶ所も中・大字として挙げられており、うち57ヶ所に「沢」の字が宛てられている。

【三角畑】

サンカクバタ。

元善光寺駅の北西側にある、非常に小さい小字である。

小さすぎて、その形状を確かめようがないが、サンカクバタとは「ほぼ三角形の形をした畑」であろう。他地区のサンカクバタ小字もほとんどが三角形になっている。

全国地図には、サンカクバタは一つも挙げられていない。

【三メ目】

サンガンメ。

天竜川氾濫原のひとつ上の段丘である低位段丘面Ⅱにある。西の沢川右岸でナカハバ小字の対岸になる。

「〇〇メ目」とは「中世以降、土地面積の表示に用いられた単位。租税として収取する米を銭に換算して表示するもの。田地の広さは一定でない」(国語大辞典)という。

三メ目の面積は三反歩よりは狭いようだ。

全国地図には、サンガンメ地名は中・大字として2ヶ所に記載があり、「三貫目」の字が宛てられている。

【三反田・四反田】

サントンダ・シタンダ。

サントンダ小字も低位段丘面Ⅱにあり、県道上飯田線の両側に広がる。

シタンダ小字はJR飯田線のすぐ北側で土曾川の近くにある。

サントンダとは「三反歩の面積の耕作

地」で、シタンダとは「四反歩の面積の耕作地」であろうか。シタンダ小字はとも四反歩はないが、小字発生時にはそれだけの面積があったのであろう。

全国地図には、サンタンダ地名が7ヶ所にも中・大字として挙げられており、その全てが「三反田」の字になっている。

【山王前】

サンノウマエ。

県道上飯田線の南西沿いにある小字で、山王社はこの小字の北西側の高地にあったものと思われる。

サンノウマエとは「山王社を祀った場所の前の土地」をいう。天竜川氾濫原側にあり、大きな堤もある。

山王信仰は比叡山東麓の大津市坂本に鎮座する日吉社を中心に展開された信仰。無仏時代の愚かな衆生を解脱に導き、病の擣を癒やすという利生の現実性と普遍性から、山王信仰は貴族はもとより最下層の民の崇敬を獲得し、やがて各地に分祀されていったという。

山王権現と権現号がつけられていたのだから、座光寺の日吉社も明治維新の神仏分離令によって公的には姿を消して、小字にのみ名が残ったのであろう。

全国地図には、サンノウマエ地名が「山王前」として1ヶ所にだけ残っている。

【猪田】

シンダか。

低位段丘面Ⅱにあり、西の沢川と土曾川の間にある。現在は畑が主で水田や果樹園、住宅地になっている。

シンダとは何か。二説を挙げる。

- ①シシ←ヒシ←ヒヂ（泥）と転訛した語で、「湿地」をいう（語源辞典）。従って、シンダとは「湿地になっている土地」か。
- ②シンダとは「猪や鹿などが出て荒らす田」（国語大辞典）であるという。あるいは、シンダとは「猪に荒らされる耕作地」

ということかもしれない。

全国地図には、2ヶ所に中・大字として挙げられているが、「猪田」の文字は無い。

【猪ノ山】

イノヤマ。

この小字は、北部山麓線の西側から高森境にまで達する広大な面積になっている。

イノヤマとは、字面の通りで「猪が出没する山」であろう。

全国地図には、イノヤマ地名は5ヶ所に中・大字として挙げられている。因みにシシノヤマ地名は記載が無い。

【篠田】

シノダ。

この小字は二ヶ所にある。一つは飯田工業高校の敷地にかかる小さなもので、もう一つは国道と JR 飯田線の間にある専用線団地にある。

シノダとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

- ①シノは副詞シノノニ、シノニなどの語幹で「びっしょりと濡れた様子」から「湿地」をいう。ダはダ（処）か。従って、シノダとは「湿気やすい土地」をいうのだろうか。

- ②シノダとは「篠竹が生えていた土地」という解釈もあり得る。

全国地図には、シノダ地名は中・大字として8ヶ所に記載があり、うち5ヶ所に「篠田」の文字が宛てられている。

【篠原】

シノハラ。

JR 飯田線の専用線団地の周辺の二ヶ所にある。

シノハラとは何か。これも語源辞典に依りつつ二説を挙げる。

- ①シノは「湿地」をいう。ハラは平坦な土地か。すなわち、シノハラとは「湿気っぽい、平坦な土地」であろうか。

②シノは「篠竹」のこと。シノハラとは「篠竹が生えていた平坦な土地」であろうか。

全国地図には、シノハラ地名は28ヶ所が中・大字として挙げられており、うち24ヶ所に「篠原」の字が宛てられている。

【清水・清水下・清水尻】

シミズ・シミズシタ・シミズジリ。

シミズ小字はゴンガ小字に挟まれて一ヶ所、シミズシタ小字はカンノンウエ小字の北隣に一ヶ所、下羽場にはシミズシタ小字とシミズジリ小字が一つずつある。座光寺には清水系小字は三ヶ所にある。段丘麓の湧水が多いというこであろうか。

シミズとは「わきでる清い水」(広辞苑)である。

シミズシタとは「自然湧水の下流側の土地」で清水を利用しやすい場所ということか、二ヶ所とも近くにシミズ小字は無い。

シミズジリも「自然湧水の下流側の土地」であろう。すでにシミズシタ小字が命名されていてシリ名をつけざるをえなかったのだろうか。下羽場の湧水地はシタ小字とシリ小字の間ということになる。

シミズ地名は多い。全国地図は236ヶ所の中・大字を挙げている。他にシミズシタ地名は2ヶ所、シミズジリ地名も5ヶ所が挙げられている。

【中羽場・中羽場前・中羽場垣外・下羽場】

ナカハバ・ナカハバマエ・ナカハバガイト・シモハバ。

ナカハバマエ小字だけは三ヶ所、氾濫原にある。ナカハバ小字とナカハバガイト小字は氾濫原より上の低位段丘面Ⅱにあり、シモハバ小字は氾濫原と上の段丘の間の傾斜地にある。

ナカ・シモは天竜川の流れに沿っているが、現在の座光寺の小字からは、ハバ

やカミハバは無くなっている。

ハバとはハバ(岨)で「傾斜地。土手などの斜面。がけ」(国語大辞典)で、群馬・山梨・信濃・岐阜の方言だという。

座光寺のハバは天竜川氾濫原とその上の段丘との間の斜面をいう。

ナカハバガイトとは、「ナカハバ小字に近い有力者の住居跡」か。

全国地図には、シモハバ地名は4ヶ所、ナカハバ地名は2ヶ所に中・大字として記載がある。

【社宮司】

シャグジ。

この小字は本城の周りのヤスミイシ小字傾斜地の麓に、三ヶ所ある。

明治12年ごろ、麻績神社に合祀された九社の中の一つである社口司社が祀られていたところである。元禄四年(1691)に村役人から寺社奉行所に提出した村内社寺の中に「佐口神社」とあるお宮である。

この小字内には石碑があり、表面には「嗣業記念碑」、裏面には「社宮寺遠跡」とある。

シャクジに宛てる文字も多様で、座光寺関係資料だけでも、上記のように三種類ある。

シャグジは石神とは異なる。諏訪の建御名方神より古い神といわれており、諏訪を中心に山梨や三遠南信・三重などに広がっている。サクジ・オシャモジ・シャクチ・サクチ・サグチ・サクジン・オサクジン・オシャグチ・ミシャグチ・オミシャグチ・サゴジンなど多様な音転呼称があり、伝承も多岐に及ぶ(民俗大辞典)。古い神である証しであろうか。

座光寺のシャクジは上野座光寺氏によってもたらされた神であろう。

全国地図には、当然ながら、シャグジ地名はひとつも挙げられていない。

【城】

ジョウ。

この小字は、座光寺小学校のあるホンジョウ小字の周辺の傾斜地に二ヶ所ある。

ジョウ（城）とは「防備のために築いたとりでの一区画」(国語大辞典)である。ホンジョウ（本城）周辺に取り残されているように見えるのは、ホンジョウ地名が後から入ってきたためであろうか。

以上から、このジョウ小字はホンジョウ小字発生前の砦跡としておきたい。

全国地図には、ジョウ地名が46ヶ所に中・大字として記載されている。

【城垣外・城坂・城原】

ジョウガイト・ジョウザカ・ジョウハラ。

これらの小字も、ホンジョウ（本城）小字周辺にある。

ジョウガイトとは「本城に関する家臣団の居住地跡」であろうか。

ジョウザカは「本城へ登る坂道のあったところ」をいうのであろう。

ジョウハラは、はっきりしないが、「城にかかわる行事が行われていた平坦地」と思われるが、具体的なことは分からない。

全国地図には、ジョウガイト地名は載っていないが、ジョウザカ地名は1ヶ所、ジョウハラ地名は3ヶ所に中・大字として記録されている。

【新屋敷・新屋敷前・新屋敷下】

アラヤシキ・アラヤシキマエ・アラヤシキシタ。

アラヤシキ小字は氾濫原の上の段丘にあり、アラヤシキマエ・アラヤシキシタ小字は氾濫原に三ヶ所ある。

アラヤシキとは、文字通り、「新しくできた有力者の屋敷のあったところ」であろう。この屋敷は、いまなお続いているのかもしれない。

氾濫原にあるアラヤシキ小字群のアラヤシキについては二説を挙げたい。

①文字通りの解釈で、アラヤシキとは「新しくできた有力者の屋敷」をいう。

②アラはアラク（墾）から「新墾地」をいう（語源辞典）。従って、アラヤシキとは、「新墾地にできた有力者の屋敷(跡)」であろうか。

アラヤシキマエはアラヤシキの近くに、アラヤシキシタはアラヤシキの下流側を意味するのであろう。

全国地図には、アラヤシキ地名は、中・大字として116ヶ所に記載があるが、うち70ヶ所に「新屋敷」も字が宛てられている。

【水神島】

スイジンジマ。

天竜川の堤防の内外にわたる、広大な小字になっている。

スイジンジマとは、文字通りであれば、「水神が祀られていた島」となる。

全国地図には、なぜかスイジンジマ地名は載っていない。

【砂田】

スナダ。

この小字は、天竜川の氾濫原に三ヶ所、上の段丘に三ヶ所ある。

スナダとは「砂地の田(土地)」をいう。氾濫原のスナダは、ほとんどが「砂地の田」であるが、段丘上のスナダは傾斜地などもあり、逆に「砂地の土地」になる。

全国地図には、スナダ地名は、16ヶ所が中・大字として挙げられている。

【正泉寺】

ショウセンジ。

土曾川左岸の沿岸にあり、ソネ小字を挟んで二ヶ所にある。

ショウセンジとは何か。

ショウセンジとは「正泉寺という、お寺があったところ」と解するのが順当と

思われる。ここには石碑が多く、三界万霊塔や地藏菩薩・勢至菩薩・聖観音・如意輪観音などの石仏群がある。

全国地図には、ショウセンジ地名が1ヶ所に中・大字として挙げられており、「正泉寺」の文字が宛てられている。

【浅間】

センゲン。

土曾川に近く、峰を含む側稜の先端部にある。

センゲンとは「浅間信仰に関わる場所」であろう。その関わり方ははっきりしていないが、明治十二年頃麻績神社に合祀された9社の中に浅間社があるので、その浅間社を祭祀していた所であろうか。あるいは小字内にある独立峰を富士山に見立てた富士講が行われていた場所である可能性もある。

全国地図には、センゲン地名は8ヶ所に中・大字として記載されている。

【千本柿】

センボンガキ。

南大島川に近く、氾濫原の一つ上の段丘上に二ヶ所ある。

センボンとは「樹木の数多く生えている様子」をいう（語源辞典）。とすれば、センボンガキとは「たくさんの柿が植えられているところ」を意味するのであるうか。

座光寺では柿相米といって柿の木に年貢が課せられていたという（村史）。柿の木が多かったのであろう。

全国地図にはセンボンガキ地名は挙げられていない。

【曾根】

ソネ。

この小字は土曾川沿岸にあり、「正泉寺」小字の間にある。現在は主に水田になっている。

ソネは「イソネ（石根）の略で、石ま

じりの瘦せ地」をいう（広辞苑）。このソネも「石まじりの瘦せていた土地」をいうのであろう。土曾川の川原だから小石も混じっていたのであろうか。

全国地図には、ソネ地名が44ヶ所に中・大字として挙げられており、うち41ヶ所には「曾根」の文字が宛てられている。

【反田】

ソリダ。

土曾川沿岸の氾濫原にある。

ソリダとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ソリは動詞ソル（反）の連用形が名詞化した語で「のけぞったような地形」をいい、ダはタ（処）。以上から、ソリダとは「急傾斜地のあるところ」か。この小字の山側は急傾斜地になっている。

②ソリは動詞ソル（剃）の連用形が名詞化した語で「剃り落とされたような地形」をいう。とすれば、ソリダとは「剃り落とされたような崩落があったところ」をいうかもしれない。土曾川の氾濫で急傾斜地が崩れたこともあったのであろうか。

全国地図にはソリダ地名が7ヶ所に中・大字として記載され、うち5ヶ所は「反田」の字を宛てている。

【対澤】

タイザワ。

この小字は、天竜川氾濫原の上の段丘の先端部に近いところに二ヶ所あり、いずれも欠野沢川に沿っている。

タイザワとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①タイ＝ダイ（台）で、「台地」をいう。従って、タイザワとは「流水のある、少し高くなっているところ」をいうのかもしれない。

②タイはタ（田）・キ（井）で「田に引く水をためる所」。タイザワとは、「田に水

を引くための堰があったところ」であろうか。欠野沢川には、こうした簡単な堰もあったことが考えられる。

全国地図には、タイザワ地名は1ヶ所にしかない。しかも、宛てられている字は「沙沢」。

【大門原】

ダイモンバラ。

この小字は中央道によって分断されている大きなのと、県道飯島飯田線が土曾川を越える付近にある小さなのと、二つがある。大きな方も昔の伊那街道である県道飯島飯田線に接している。

ハラはハラ（腹）で「山の頂と麓の間の広いところ」をいう（国語大辞典）のであろうことは分かりやすい。では、ダイモンバラとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ダイモン（大門）は寺の総門をいう。大門原には耕雲寺があったのではないかと村史はいう。今でも最も近い寺院は耕雲寺であるが、あるいは、もっと離れているが元善光寺かもしれない。以上から、ダイモンバラとは「お寺の大門があった土地」であろうか。やや無理気味でもある。

②モンは「木戸門」をいう（語源辞典）。ダイモンバラとは、「街道の木戸門がある、山腹の広い緩傾斜地」をいうか。小さな方のダイモンバラ小字は伊那街道が土曾川を渡る場所にある。

全国地図にはダイモンバラ地名もダイモンハラ地名も挙げられていない。

【大門横道下】

ダイモンヨコミチシタ。

中央道沿いで座光寺PAの近くにある、小さな小字である。

ヨコは「南北の方向に対して東西の方向」をいう（国語大辞典）。従って、ダイモンヨコミチシタとは、「寺院の大門に通

じる東西方向の道の下方の土地」をいうのであろう。

【田上】

タウエあるいはタガミか。

この小字は北の高森境に近く、県道飯島飯田線と伊那南部広域農道の間にある。側稜の先端部にあり、現在はほとんどが果樹園になっている。

タウエであれば、字面の通りで「水田の上の方にある土地」ということになる。南側の洞には少しばかりの水田が現在でも果樹園に囲まれている。

全国地図には、タウエ地名は記載がないが、タガミ地名は20ヶ所に中・大字として載っており、うち14ヶ所に「田上」の文字を宛てているのが気に掛かる。

【高岡】

タカオカ。

この小字は、飯田工業高校から高岡の森までを含んでいる。

タカオカとは「小高くなっている丘のあるところ」を意味する。“小高くなっている丘”とは高岡1号古墳である。

全国地図には、タカオカ地名は44ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【高越】

タカゴシ。

この小字は、二ヶ所、ヤクシ小字の南隣と南大島川の沿岸にある。

タカゴシとは何を意味するのか。恐らく、「腰ぐらいの高さの土地」をいうのではないだろうか。南大島川のタカゴシは自然堤防の微高地をいうのであろう。

全国地図にはタカゴシ地名は載っていない。

【田頭】

タガシラ。

伊那南部広域農道の西方にあり、近くを分岐した西の沢井が流れている。

タガシラとは「水田の最上流部」をい

うのであろう。現在もタガシラ小字のすぐ下方から水田が始まっており、井水のタガシラ小字より上流部は殆どが果樹園になっていて田んぼはない。

全国地図には、タガシラ地名は15ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「田頭」の文字が宛てられている。

【高見】

タカミ。

J A座光寺支所の西隣付近にある小さな小字である。

タカミとは「物見をするための小高い場所」をいう。本城の物見である。鈴岡城には遠見がある。

先のタウエ（田上）小字もタカミ（高見）の可能性がある。

【瀧場】

タキバ。

南大島川が天竜川に合流する直前に、天竜川に並行して南に流れている。その沿岸にある小字である。

タキバは「流れが早いところ」をいう。南大島川のタキバ小字の上流部には数多くの堰が設けられているが、これは未確認ではあるが、流が激しくて河床を削るのを防ぐ意味があるのかもしれない。

タキバ地名は全国地図には1ヶ所にしかなく、しかも宛てられている字は「滝馬」となっている。

【田尻】

タジリ。

ジョウガイト小字の周辺の傾斜地に2ヶ所ある。ジョウガイト（城垣外）小字は現在、水田になっている。

タジリとは何か。二説を挙げておきたい。

①タジリとはタ（田）・ジリ（尻）で文字通り、「田んぼの末端部」をいうか。ジョウガイト小字にある水田の余りを水を受けるような位置にある。

②タジリ←タシリと濁音化した語で、タシ・リ（場所）か。タシには「窮迫。ゆとりがない」の意があり「行き詰まった地形」をいう（語源辞典）。リは接尾語。以上から、タジリとは「谷が行き詰まったところ」をいう。谷の最も奥まったところを指すのであろうか。

全国地図にはタジリ地名は中・大字として85ヶ所に挙げられており、うち81ヶ所が「田尻」の字を宛てられている。

【立経塚】

タテキョウヅカ。

土曾川に近い大きな扇状地の中腹に、大きな小字と小さい小字があり、周辺の所々にはクチアケヅカと接している。

タテはタテ（立）で、「低地に臨んだ丘陵の端」をいう（語源辞典）。

タテキョウヅカとは、「扇状地の端で、経塚があったところ」であろうか。経塚についてはまだ確かめていない。

全国地図には、タテキョウヅカ地名は記載が無い。

【立ノ道】

タテノミチ。

イチバ小字の北隣にあり、長方形の長辺はほぼ元善光寺を向き、短い辺は麻績神社を指向している。

タテとはタテ（縦）で「前から後への方向」をいう（広辞苑）とすれば、タテノミチとは「元善光寺か麻績神社へ向かう道」になる。結果は90°違ってくるのであるが、どちらとも決めがたい。

全国地図にはタテノミチ地名は記載が無い。

【長生島】

チョウセイジマ。

阿島橋より上流側の沿岸にある、これも大きな小字である。

セイはセ（背）が長音化した語で「物の背中のようにになっている所」をいうの

であろう（語源辞典）。すなわち、チョウセイジマとは「背中のように長くて大きな島であったところ」を意味するのであろうか。

チョウセイジマ地名も全国地図には無い。

【鶴川】

ツグミガワ。

急傾斜地を流れ下って流が緩やかになった土曾川沿岸にある。

ツグミガワとは何を意味しているのであろうか。三説を挙げておきたい。

①ツグミは動詞ツグム（噤）の連用形の名詞化した語で、「閉じる。多く“口をつぐむ”の形で用いて、黙る意にいう」（国語大辞典）という。以上から、ツグミガワとは「川音が静かになった川の付近」を意味するのであろうか。

②語源辞典に依りながら別の解釈を示す。ツク＝ツキで、ツキより古い形であったかもしれないという。ツキは動詞ツク（漬）の連用化した語で「水につかる所」をいう。ミは「辺」の転で「漠然とした場所を示す」という。以上から、ツグミガワとは、「水に漬かりやすい川辺」であろうか。

③この解釈も語源辞典に依る。ツはツ（津）で「水のある所」をいい、クミは動詞クム（朽）の連用形から「湿地」を意味する。すなわち、ツグミガワとは「湿地になっている水のある川辺」か。土曾川だけではなく、井水が何本も流れている場所である。

全国地図には、ツグミガワ地名は記録されていない。

【辻ノ内】

ツジノウチ。

伊那南部広域農道を挟んで広がる大きな小字一ヶ所とその上の方、大堤溜池との間に小さいのが一つある。大堤団地の

東隣になる。現在は、殆どが果樹園で、やや高い所は畑地になっている。

ツジノウチとは何か。これもわかりにくい小字である。ツジ（辻）は「道路の交差点」をいい、ウチ（内）は「ある範囲の土地の区画」のこと。側稜先端の台地の上のほぼ平坦な緩傾斜地になっている部分を区画としたのであろう。

以上から、ツジノウチとは「数カ所の辻がある、ほぼ平坦な土地の区画の内側」というややこしい解釈になる。旧伊那街道と寺社地区との間にあり、市場も開かれることが多かったのかもしれない。

全国地図には、ツジノウチ地名は、3ヶ所に挙げられている。

【堤上・堤下・堤田・堤原・堤脇】

ツツミウエ・ツツミシタ・ツツミダ・ツツミハラ・ツツミワキ。

座光寺には井水や堤が多いので、堤にかかわる小字も多くなっている。

原大堤周辺には「堤上」「堤下」「堤原」などの小字があり、古瀬儀右衛門堤には「堤田」小字がある。

たくさんの堤がある中で、ツツミ小字群のあるのは、原大堤と古瀬儀右衛門堤の二つしかない。この二つは天明八年までに造られている（村史）。この1788年ごろより以前に座光寺のツツミ小字群が発生していると考えていいのではないだろうか。

ただし、1788年以前の古いツツミがあっても、既にその周辺に小字名がある場合には、ツツミ関係小字にはなっていない。

【坪ノ内】

ツボノウチ。

麻績神社の前の広場で、現在、麻績の館・座光寺地域センター・郷土資料館などがある所から、その下側の水田・果樹園を含む広い小字になっている。麻績神社の建物があつたり神事が行われたところ

であろうか。

ツボノウチとは「中庭の建物の間や垣根の内側などにある庭をさしている」(国語大辞典)。ここのツボノウチも同様に「垣根に囲まれたお宮関係の建物や庭にあるところ」としておきたい。

全国地図にはツボノウチ地名は15ヶ所で中・大字として挙げられている。

【ツボノ内】

ツボノウチ。

天竜川の氾濫原にある。先の「坪ノ内」小字と意味が異なると判断して、別項を立てた。

ツボノウチとは「ほぼ一坪の水田」をいうのであろう。一坪とは一町歩で約109m²平方の面積になる。この小字内にはイカワヨケウチ小字があるので、それを除いて考えると、ほぼ一坪の計算になる。新田を区分けするのに坪を単位としていたことがわかる。

【坪尻】

ツボジリ。

欠野沢川と県道上飯田線に挟まれた小さな小字でテラダ小字と並んでいる。

ツボ(壺)というほどには深い凹地になってはいない。

v ツボジリとは、はっきりはしないが、「土地の区画で最後に出てきた端数の土地」をいうのであろうか。

少なくない小字であるが、いまだに不明の小字である。

【出口】

デグチ。

JR 飯田線の南側にあり、並木沢川に接する小さな小字である。

デグチとは、「人か井水の出入口」であろう(語源辞典)。この小字は道路にも並木沢川にも面しているので、どちらかの判断は難しい。

全国地図には、デグチ地名は46ヶ所

に中・大字として挙げられており、その全てに「出口」の字が宛てられている。

【寺田】

テラダ。

先に挙げたツボジリ小字の隣と、もう一ヶ所、県道上飯田線の南側の氾濫原から登った低位段丘面にある。

テラダは「寺院所有の田地」(広辞苑)。したがって、テラダとは「寺院所有の田地であった所」であろう。

全国地図でもテラダ地名は55ヶ所と多い。

【寺地沢・寺地澤・寺地沢上・寺地沢下・寺地沢尻】

テラチサワ小字群である。テラチサワ小字は六ヶ所、他は一ヶ所ずつとなっている。県道上飯田線の南側の氾濫原とその上の低位段丘面にある。

テラチは「寺の地所。寺の敷地」(広辞苑)とあるが、このテラチサワ小字群はいずれも寺院にはないので、寺田をいうのであろう。

すなわち、テラチサワとは「寺の地所で井水が流れている所」をいうのであろう。なお、テラチサワという名の井水は無い。

テラチサワジリとは、「テラチサワ小字群の末端部」をいう。天竜川に最もちかいところにある。

全国地図には、テラチサワ地名は一つも記載は無い。

【土曾川】

ドソガワ。

ほぼ上郷境を流れる川も同じ名称になっている。ドソガワ小字は土曾川が緩傾斜地に入る中流から下流までの間に三ヶ所ある。もちろん、いずれも土曾川沿岸にある。

ドソガワとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら、三説を挙げたい。

①ド⇄ノの交替はよく見られるという。ドソ=ノソ←ノセと転訛したとみる。ノセは「緩傾斜地」をいう。従って、ドソガワとは「緩傾斜地を流れる谷川」ということになるがどうであろうか。

②ドソ=ノソ←ノゾと転じた語。ノゾは動詞ノゾク（除）の語幹で「浸食地形」をいう。つまり、ドソガワとは「浸食の激しい谷川」か。土曾川の流が急に緩やかになったあたりの谷幅が広がっており、浸食の状況がわかる。

③ド←ドウと転じた語で、川音をいう。ソはソ（背）でセ（瀬）を意味し、「急流」をいう。従って、ドソガワとは「水量の多い時など、川音が激しく流れる谷川」を意味することも考えられる。

全国地図にはドソガワ地名は一ヶ所に中・大字として挙げられているが、それは2.5万分の1「飯田」である。

【土手下】

ドテシタ。

南大島川が南流する直前の氾濫原にある。現在は、下流側に養魚場がいくつかある。

ドテは南大島川が氾濫した時に流水を防ぐための簡単な堤防と思われる。

ドテシタとは、「簡単な堤防の下流側の土地」をいうのであろう。

全国地図には、ドテシタ地名が3ヶ所に中・大字として挙げられている。

【鳥屋場・鳥矢場】

トヤバ。

この小字は二ヶ所にある。一つは県道飯島飯田線の南東側で土曾川近くの北向きの緩傾斜地に、もう一つは南大島川の近くの北東～東向きの緩傾斜地にある。

トヤバとは「網を張って小鳥をとる所」（国語大辞典）で、栃木・下伊那の方言であるという。

鳥屋という狩猟法は中部地方に多く見

られ、ツグミ・ホオジロ・ヒワなどの渡り鳥を捕獲するもので、捕らえた鳥は現地において伝統的に食利用されてきた。渡りの経路にあたる山間地や稜線に捕鳥場（鳥屋）を設け、数十反のカスミ網を張り巡らし、一網打尽にする。この狩猟の対象鳥は現在では捕獲が禁じられている保護鳥である。（民俗大辞典）

全国地図には、トヤバ地名は中・大字として2ヶ所に記載がある。

【中谷・中谷垣外】

ナカヤ・ナカヤガイト。

これらの小字は、西の沢川上流部の右岸にある。ナカヤガイト小字は二ヶ所、ナカヤ小字は一ヶ所になる。現在は、水田と果樹園を含めた畑になっている。

ナカヤとは何か。二説を挙げたい。

①ナカは「山地と平地との間」をいうか、あるいは「二本の流水である土曾川と西の沢川の間」をいうのか、どちらかと思われるがどうであろうか。ヤはヤツ（菴）の略で「湿地」をいう（語源辞典）。以上から、ナカヤとは「山地と平地の間（あるいは二本の流水の間）にある湿地」をいうのであろうか。

②ナカヤはナカヤ（中屋）かもしれない。ナカヤとは「地域の中心となる有力者の屋敷付近」をいう。

ナカヤガイトは、「ナカヤ付近にある居住地跡」ということになるが、どうであろうか。

全国地図には、ナカヤ地名は中・大字として64ヶ所に記載がある。

【中ヶ島】

ナカガシマ。

この小字は、県道上飯田線より南側に三ヶ所ある。

このナカ（中）は、座光寺の天竜川沿岸の中程の辺を意味しているものと思われる。

従って、ナカガシマとは「座光寺の天竜川沿岸の中程にある島だったところ」をいう。

全国地図には、ナカガシマ地名は記録されていない。

【中島】

ナカジマ。

大堤団地の一部を含む広大な小字である。

段丘の先端部になっているので、それをシマ（島）に見立てたのであろうか。

ナカは「山地と平地の間」をいうのか、「二本の流水の間（土曾川と西の沢川）」をいうのか、はっきりしない。

以上からナカジマとは「二つの中程にある島状に突き出ているところ」をいうのであろうか。

全国地図には、ナカジマ地名は、中・大字として262ヶ所にも挙げられている。

【中田】

ナカタ。

この小字は JR 飯田線の専用線団地付近にある。

ナカタとは「座光寺のほぼ中心となる辺り」をいうか。タはタ（田）より、タ（処）の方ではないかと思われる。

全国地図には、ナカタ地名は35ヶ所に中・大字として記載されている。

【中平】

ナカダイラ。

天竜川氾濫原から次の段丘に登る傾斜地にある、小さな小字である

この地名が生まれた時には、小字内はもっと広くて平坦地もあったと思われる。

ナカは金井戸井と西の沢川の間をいうのであろうか。ダイラは「平坦地」である。以上から、矛盾はあるが、ナカダイラとは「二本の流水の間にある平坦地」としておきたい。

全国地図には、ナカダイラ地名は中・大字として44ヶ所が挙げられている。

【中釣根】

ナカツリネ。

県道飯島飯田線と伊那南部広域農道の間にあり、本沢井と西の沢井に挟まれている。

ナカツリネとは何をいうのか。ナカ（中）は、「二本の井水の間」をいうのであろう。ツリネ←ツルネが転訛した語で「蔓のように長く伸びて連なった小高いところ」（国語大辞典）をいう。

以上から、ナカツリネとは「二本の井水の間にある段丘の小高い峰のつながっているところ」を意味するのであろう。この場合のナカは「山地と平地の間」をいうナカ（中）ではない。

全国地図には、ナカツリネ地名もナカツルネ地名も記載はない。ツルネ（鶴根）地名が2ヶ所にあるだけ。

【流川】

ナガレガワ。

この小字は JR 飯田線のすぐ北西側にあつて、南西端を欠野沢川が流れている。

ナガレガワとは「流がとどこおらない川。たえず水が流れている川」（国語大辞典）をいう。

座光寺のナガレガワは欠野沢川で、絶えず水が流れているだけの水量があるということを意味しているのであろう。

全国地図には、ナガレガワ地名一つだけあり「流川」の字を宛てている。

【流田】

ナガレダ。

大きな小字である。国道153号線を跨いでおり、北端を並木沢川が流れており、中を西の沢川が横断している。

ナガレダとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①ナガレダとは、字面の通りで、「流れた

田)、つまり「大雨の時などで崩れたこたのある田んぼがあった所」をいうかもしれない。

②ナガは静岡県榛原郡の方言で「傾斜地」をいい、ラは「場所」を示す接尾語（以上は語源辞典）。すなわち、ナガレダとは「傾斜地になっていて、水田のあるところ」か。

全国地図には、ナガレダ地名は10ヶ所に、中・大字として挙げられていて、その全てに「流田」の字が宛てられている。

【ナギジリ】

土曾川の川岸にあり、土曾川が JR 飯田線と交叉する地点の上流側にある。

ナギはナギ（薙）で「山で薙ぎ落としたように崩れた地点」（広辞苑）をいう。

従って、ナギジリとは「土石流の末端部になっていたところ」をいうのであろう。コボラ（小洞）という崩壊しやすい谷がこの小字に向かって開口しており、流れ下った砂礫が堆積した場所であったと思われる。

ナギジリ地名は、なぜか全国地図には載っていない。

【七草田】

ナナクサダ。

この小字は国道153号線が旧道と交わる交差点の北側にあり、北端を並木沢川が流れている。

ナナクサダとは何を意味するのか。三説を挙げておきたい。

①ナナクサダとは文字通り、「春のナナクサすなわちナズナが自生していたところ」であろうか。この地域では、ナズナを七草と呼んでいる。

②ナナはナナメ（斜）の下略形で「傾斜地」をいい、クサは動詞クサル（腐）の語幹で「湿地」をいう（以上は語源辞典）。すなわち、ナナクサダとは「緩く傾斜している湿地」を意味するのであろうか。

やや複雑にすぎるか。

③ナナは美称でクサを「湿地」とすると、ナナクサダとは「湿地になっていたところ」であろうか。

全国地図には、ナナクサダ地名は無い。

【縄手】

ナワテ。

この小字は国道153号線と旧国道との間にある。

ナワテとは何か。国語大辞典によって、一応、二説を挙げておきたい。

①ナワテは「田の間の道」をいう。これだけで小字名になるのかどうか、疑問ではある。それがどうした、という感じにもなる。

②ナワテとは「長く続くまっすぐな道」をいう。ナガチ（長道）の訛という見方もある（俗語考）。座光寺のナワテ小字の南端には並木沢川が流れているが、この井水に沿った道路は直線になっている。

全国地図には、ナワテ地名は4ヶ所に中・大字として挙げられており、うち3ヶ所は「縄手」の字が宛てられている。

【西久保・西ノ久保】

ニシクボ・ニシノクボ

これらの小字は座光寺の西部にあり、県道飯島飯田線と伊那南部広域農道の間で四ヶ所分布している。いずれも小さな小字である。

いずれも小さな洞にあり、ニシ（ノ）クボとは、「（座光寺の）西部地区にある窪地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ニシクボ地名は中・大字として17ヶ所に挙げられている。

【西ノ沢・西ノ澤】

ニシノサワ。

これらの小字は西ノ沢川の井水に沿って四ヶ所に分布している。

井水名と小字名のどちらが先であったのであろうか。地図を見るかぎり、西ノ

沢井には自然水の支流が入っており、井水前に自然水が流れていたことがわかる。従って、自然水がはじめにありき、で次にその流域に小字名が成立して、その後井水が名付けられたと思われる。

ニシノサワとは「(座光寺の)西部を流れる谷川」を意味するのであろう。

全国地図にはニシノサワ地名は39ヶ所に中・大字として挙げられている。

【如来下】

ニョライシタ。

この小字は元善光寺のあるイチバ小字の南東隣にある。

珍しく明瞭な小字である。ニョライシタとは「阿弥陀如来が鎮座する場所の下側にある土地」である。これだけは断定してもいい。

しかし全国地図には、なぜか少ない。ニョライシタ地名はゼロで、ニョライ地名がわずか1ヶ所にあるだけ。

【猫林】

ネコバヤシ。

県道飯島飯田線のすぐ北西隣にあり、カミバヤシ小字との間に挟まれている。

ネコバヤシとは珍しい小字であるが、何を意味しているのであろうか。語源辞典を参考にしながら、二説を挙げる。

①ネコ←ネキ(根際)と転じた語で、「側。かたわら」をいう。隣にカミバヤシがあるので、「神聖な地のかたわら」を意味するのであろう。以上から、ネコバヤシとは「神聖な土地の傍らにある樹木の繁っていた場所」をいうのであろうか。

②ネコはネ(峰)・コ(処)で「微高地」をいう。従って、ネコバヤシとは「微高地にある樹木が繁っていたところ」を意味するか。台地の先端が少し突き出ているところに、この小字はある。

全国地図には、ネコバヤシ地名は無い。

【白山】

シラヤマ。

この小字は、天竜川氾濫原の上の段丘面の先端部に二ヶ所ある。

シラヤマとは何か。二説を挙げておきたい。

①シラヤマとはハクサン(白山)の古称(広辞苑)だという。とすれば白山比咩神社が分祀されていた所かもしれない。村史にある白山権現社がここに祀られていた可能性も否定できない。

②シラヤマ(白山)←シロヤマ(城山)と転じた語ではないだろうか。シラヤマ小字の間にはガニガジョウ(蟹ヶ城)小字があり、南側にはコジョウ(古城)小字もある。シラヤマとは「紫のあったところ」で、知久氏に対する構えとみたいが、どうであろうか。

全国地図には、シラヤマ地名は18ヶ所に中・大字として挙げられており、うち16ヶ所には「白山」の字が宛てられている。

【白山下・白山前・白山沖】

これらのシラヤマ小字群の数は多いが、一部は氾濫原から上の段丘に登る傾斜地にあるが、ほとんどが天竜川の氾濫原にある。

【馬死実】

バシジツ、あるいはマシミか。

座光寺小学校の南側でジョウザカ小字とヒヤクタキ小字の間にある小さな小字である。現在は周辺が落葉樹林になっているのに、ここだけは畑になっている。

なんとも分かりにくい名前であるが、無理をして二説を挙げたい。

①バシジツ←マシシツと転じたか。マシは「細かい砂」をいう(語源辞典)。シツはシツ(湿)で、「湿地」をいう。すなわち、バシジツとは「細かい砂地である湿地」を意味する。

②マシミとしたい。マは接頭語で「完全

な」の意で、シミは動詞シム（浸）の連用形が名詞化した語で「湿地」をいう（以上は語源辞典）。以上から、マシミとは「完全な湿地」すなわち、掘れば湧水のある場所をいうのではないだろうか。

以上、結論は同じであるが、城にとっては必要な水源のあるところとしたい。現在はホンジョウ（本城）小字を大井が流れているが、村史によれば、恐らくここを大井が通るようになったのは、元禄三年（1690）以降と思われる。本城には流水が無いか、あるいは、あっても外部から遮断されてしまうような流水であったのではないだろうか。

全国地図にはバシジツ地名は、むろん無い。

【橋場】

ハシバ。

低位段丘面Ⅱにあって、南端を西の沢川が流れている。

ハシバとは何か。二説を挙げておきたい。

①ハシバといえば「橋が架かっている所」となる。しかし、この井水に小字として残るような橋が必要であったのかどうか、という疑問もある。そこで、別の解釈を挙げておきたい。

②ハシはハシ（端）で「縁辺。へり」をいう（語源辞典）。すなわち、ハシバとは「縁辺になっている所」である。もう少し説明を加えると、ハシバとは「井水が縁辺を流れているところ」ということになる。

全国地図には、ハシバ地名が38ヶ所も中・大字として挙げられており、うち、36ヶ所で「橋場」の文字が宛てられている。

【初崎】

ハツザキ。

低位段丘のハシバ小字の東隣にある。

ハツザキとは何をいうのか。これもはっきりしない地名である。それでも、語源辞典に依りながら考えていきたい。

ハツはハツ（果）で「終端の地」をいい、サキは動詞サク（割）の連用形が名詞化した語で「割かれたような地形」をいう。

以上から、ハツザキとは「緩傾斜地のわずかな丘の先端部で、井水に割かれたようになっている所」をいうのであろうか。

全国地図にはハツザキ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「初崎」の字が宛てられている。

【八丁地】

ハッチョウジ。

低位段丘面の県道上飯田線の南側にある。恒川遺跡群の田中・倉垣外地籍のすぐ南側になる。

ハッチョウジとは何を意味しているのか。八丁なら872mの長さになるが、この小字は長いところでも200mに満たない。地名発生時にはもっと広がったのかもしれない。しかし、なぜハッチョウという地名が残っているのかを考えながら、語源辞典を参考にして二説を挙げておきたい。

①ハッチョウ（八丁）は「方八丁」の略で、古代国府の跡地を示すことがあるという。国府に代名詞のように使われていたとうことであろうか。とすれば、「方八丁」は郡衙の代わりに使われてもおかしくなはい。ジはジ（寺）のことという。以上から、ハッチョウジとは「郡衙にかかわりのある寺院のあったところ」となる。もしかしたら郡寺であろうか。

②ハッチョウ←バッチョウ←バンジョウ（番匠）と転訛することがあるという。ジはヂ（地）で「土地」をいう。従って、ハッチョウジとは、「大工職人の所有地で

あった耕地」を意味するのであろうか。免田として扱われていたのであろう。

全国地図には、ハッチョウジ地名は4ヶ所の中・大字として挙げられており、その全てに「八丁地」の字が宛てられている。

【花立】

ハナタテ。

J R 飯田線と県道市場桜町線に挟まれていて土曾川にも近い。

ハナタテとは何か。ハナはハナ（端）で「突き出た地形」をいい、タテ（立）は「低地に臨んだ丘陵の端」を意味する（以上は語源辞典）。

以上から、ハナタテとは「低い丘陵の先端が突き出しているところ」であらうか。緩傾斜地になっていて、それほど目立った高さの丘陵ではない。

全国地図には、ハナタテ地名は9ヶ所の中・大字として記載があり、その全てに「花立」の字が宛てられている。

【原田】

ハラダ。

西側は大堤溜池のあるツツミハラ小字に接している、広い小字である。現在は果樹園・畑・水田になっている。

ハラダはハラ（原）・ダ（処）で、「山地と氾濫原の間にある緩傾斜地の広がったところ」を意味するか。

全国地図でも、中・大字として74ヶ所にも挙げられており、少なくはない。うち73ヶ所に「原田」の字が宛てられている。

【半崎】

ハンザキ。

天竜川氾濫原から登った低位段丘面の先端部にあり、シラヤマ小字やカニガジヨウ小字に接している。段丘崖の縁ちかくにあつて、現在は果樹園と畑になっている。

ハンはハナ（端）の転じた語で、サキ（先）で「先端部」をいう。ハンザキとは、やや語が重複するが、「段丘崖に面した段丘の先端部」をいうのであろうか。

全国地図には、ハンザキ地名は3ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【半ノ木】

ハンノキ。

南大島川氾濫原の上の段丘の緩傾斜地に、大きいハンノキ小字と小さいのがある。美女下の堤に接しており、現在は大部分、水田と果樹園になっている。

ハンノキとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ハンノキといえは、ハリノキともいうカバノキ科の落葉高木である。ハンノキとは「ハンノキが自生していたか植えられていたところ」をいうのであろう。水田の畔に植えて稲掛けにする地方もあるが、この地方ではあまり聞かない。むしろ焼畑では植えて空中窒素の固定に期待したという。しかし、ここで焼畑が行われていたのかどうか、疑問がないわけではない。

②ハンノはハリ（墾）・ノ（野）の転じた語で、「開墾地」をいい、キは「カ、コ、クと転じて用いられる“処”」のこと（以上は語源辞典）。従って、ハンノキとは「開墾地であったところ」をいうのかもしれない。

全国地図には、ハンノキ地名は6ヶ所の中・大字として記載がある。

【火打原】

ヒウチバラ。

座光寺小学校のあるホンジョウ（本城）小字の東側傾斜地にある。

ヒウチバラとは何か。これも分りにくい地名である。二説を挙げる。

①ハラはハラ（腹）で、台地の傾斜地中腹部をいうのであろう。ヒウチとは火

打石によって火を打ち出すこと。以上から、ヒウチバラとは「火を打ち出して焼く焼畑が行われた傾斜地」をいうのかもしれない。

②ヒウチ（火打）は建築用の斜材。すなわち、ヒウチとは「建築用の斜材のような勾配になっている傾斜地」をいうのであろうか。

全国地図には、ヒウチバラ地名とヒウチハラ地名が、1ヶ所ずつ、中・大字として挙げられている。

【ヒエ田】

ヒエダ。

南北を、並木沢川と西の沢川の二本の井水に挟まれ、西端には県道市場桜町線がある。

ヒエダとはヒエダ（稗田）をいうのであろう。井水を通じる前は、自然の湧水を利用していたのであろう。その頃は田稗を栽培してところだったに相違ない。水温が低くても収穫のある作物である。稗田は肥過田の調整田として有効であったという。

全国地図には、ヒエダ地名は34ヶ所の中・大字として挙げられている。

【日蔭田】

ヒカゲダ。

南大島川の氾濫原に二ヶ所ある。いずれも北東～東向きに開けた土地になっている。現在は、ほとんどが果樹園になっている。

ここのヒカゲダとはヒカゲダ（日影田）で「日当たりのいい土地」をいうのであろう。

全国地図にはヒカゲダ地名は、なぜか見当たらない。

【美女】

ビジョウ。

座光寺北部の緩傾斜地にあり、三ヶ所に分布している。

ビジョウとは何をいうのか。これも難しい地名であるが、思い切って三説を挙げておきたい。

①ビショビショからビショウ→ビジョウと転じたか。ビジョウは「湿地」をいうのであろうか。

②ビジョウ←ヒデフ←ヒヂ（泥）・フ（生）と転訛した語で、「湿地になった所がある土地」をいうのかもしれない。井水が通るようになったことを指しているか。

③もしかしたら、ビジョウ←ヒ（火）・ジョウ（城）であったかもしれない。ビジョウとは「狼煙を上げた砦」か。

全国地図には、ビジョウ地名は載っていない。

【百瀧】

ヒヤクタキ。

座光寺小学校の南側急傾斜地にあり、この小字北東端を欠野沢川が流れ下っている。

タキ（滝）は「傾斜が急で奔流になっているところ」をいう。ヒヤクタキとは「急流になっている所がたくさんある谷」をいうのであろうか。

全国地図には、ヒヤクタキ地名も載っていない。

【百人新田】

ヒヤクニンシンデン。

この小字は、南大島川が天竜川に合流する地点の上流部氾濫原に三ヶ所ある。

ヒヤクニンシンデンとは「多くの人達が耕作者になった広い新田」をいうのであろう。

このヒヤクニンシンデン地名も全国地図には挙げられていない。

【平】

ヒラ。

この小字は天竜川の氾濫原に面した低位段丘の先端部の緩傾斜地にある。南端は西の沢川に接している。

ヒラとは黄泉平坂のヒラで、「台地の端の緩傾斜地」としておきたい。

全国地図には、ヒラ地名は44ヶ所も中・大字として挙げられている。

【広田・広畑】

ヒロタ・ヒロハタ。

これらの小字は、JR飯田線と国道153号線の間であり、西端はタカオカ小字群に接している。

ヒロ←ヒラと転じた語で「緩傾斜地」をいう（語源辞典）。従って、ヒロタとは「緩傾斜地にある田んぼ」あるいは「緩傾斜地になっているところ」をいい、ヒロハタとは、「緩傾斜地にある畑」ということになりそうだ。

全国地図には、ヒロタ地名が25ヶ所、ヒロハタ地名が22ヶ所、中・大字として記録されている。

【藤ノ木】

フジノキ。

この小字は元善光寺駅付近四ヶ所、土曾川の近くに一ヶ所ある。

フジノキとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①フジノキとは文字通り、「大きなフジが咲いていたところ」であろうか。駅付近のフジノキ小字は元は繋がっていて、そこに大きな藤の木があったのかもしれない。

②フジ←フヂ←フチ（縁）と転じた語で、「段丘の縁」をいい、ノキは「家の裏手の土地」をいう。“裏手の土地”は、伊那谷、水窪の方言らしい。以上から、フジノキは「家の裏手が段丘の縁で傾斜地になっているところ」であろうか。

全国地図には、フジノキ地名が31ヶ所に中・大字として挙げられている。

【二ツ分】

フタツワケ。

この小字は土曾川近くで国道153号

線を跨いでいる。現在は水田と居住地になっている。

フタツワケとは何か。ワケは動詞ワケ（分）の連用形が名詞化した語。従って、フタツワケとは、字面の通りで「二ツに分けたところ」を意味するのであろう。二分したのは井水で、この場合は、カンザ井（蟹沢井）のことかと思われる。座光寺は井水が錯綜しており、井水名の特定に間違いがあるかもしれない。

フタツワケ地名は、全国地図には記載が無い。

【古市場】

フルイチバ。

この小字は座光寺北部の南大島川氾濫原から低位段丘までの間に三ヶ所あり、中には広い面積を有するものもある。

新しいイチバ小字は元善光寺付近にあり、フルイチバは文字通りの「以前に、市場があったところ」をいうのであろう。この地名発生時に古市場から市場に変わったものと思われる。

中世の市場は川沿いや辻・寺社の門前で開かれることが多かったという。

全国地図には、フルイチバ地名は11ヶ所に、中・大字として載っている。

【分木下】

ブンキシタ。

県道飯島飯田線から少し下ったところであり、クボ小字とナカハラ小字に挟まれた細長い小字で西の沢井に沿っている。

ブンキシタとは「井水が分岐している地点より下流側の土地」をいうのであろう。特別の井水管理が必要なところだたのかもしれない。

全国地図には、ブンキシタ地名は載っていないが、ブンキ地名は2ヶ所に記載がある。

【平地】

ヒラジ。

この小字は、天竜川・南大島川の氾濫原にあり、西のウエノ小字と東のタカオカ小字に挟まれている。

ヒラジとは、「平坦な土地」を意味するが、やや単純にすぎるか。他になにか意味があるのだろうか。

語源辞典はハッチョウジ小字で触れたように、ジ（地）をジ（寺）として「寺のこと。役所、官衙の意もある」としていることを、参考までに挙げておきたい。

全国地図には、ヒラジ地名は2ヶ所の中・大字として挙げられているが、「平地」の字は無い。

【細田】

ホソダ。

国道153号線と並木沢川に囲まれていた小字である。

ホソダとは字面の通りで、「細長い水田のあるところ」を意味するものと思われる。

全国地図には、ホソダ地名は、35ヶ所にもあり、いずれも「細田」の字が宛てられている。

【畑ヶ島】

ハタケガシマ。

この小字は天竜川氾濫原にあって、県道上飯田線の北東隣にある。

ハタケガシマとは、かつて「天竜川の中洲で耕作をしていたところ」をいうのであろう。堤防が整備される前には、この小字の北西側にも天竜川が流れていて、この小字は島になっていたものと思われる。

全国地図にはハタケガシマ地名は記載されていない。

【大門原久保】

ダイモンバラクボ。

この小字の中を土曾川と中央道が貫いている。土曾川の谷になっている所で両岸は急傾斜地になっている。

北隣にはダイモンバラ小字がある。

ダイモンバラクボとは、「大門原の近くで凹んだ谷になっているところ」をいうのであろう。

【前田】

マエダ。

この小字は二ヶ所にある。一つは低位段丘面の共和農業生活改善施設の近くで西の沢川右岸にあり、もう一つは耕雲寺の南西隣にある。

マエ（前）の基準になるのは寺社が有力者に屋敷である。ここでは耕雲寺前のマエダは「耕雲寺前の土地（田んぼ）」であり、低位段丘面のマエダは「ナカヤガイト小字にあった有力者の屋敷前にある土地（田んぼ）」を意味する。

全国地図には、マエダ地名は139ヶ所と非常に多い。

【正木】

マサキ。

この小字はJR飯田線と並木沢川との間にある。これも低位段丘面Ⅱにある。

マサキとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①マサキはマ（単なる接頭語）・サキ（先）で「山丘の先端」をいう。すなわち、マサキとは、「緩傾斜地であるが、わずかに丘の先端部になっているところ」か。

②マサキはマサ・キで、マサはマサゴ（真砂）の下略、キは「場所」を示す接尾語。以上から、マサキとは「細かい砂地になっているところ」をいう。

全国地図では、マサキ地名は25ヶ所の中・大字として挙げられており、うち9ヶ所が「正木」の文字になっている。

【松林】

マツバヤシ。

この小字は土曾川に近く、県道飯島飯田線の東西にわたる広い面積を有している。

マツバヤシとは、字面の通りで「アカマツが自生している林のあるところ」をいうのであろう。

この小字発生時には、未開墾で松林が多かったのであろうか。

全国地図には、マツバヤシ地名は13ヶ所に中・大字として挙げられている。

【間根添】

マネゾエ。

低位段丘面Ⅱの県道上飯田線の南方にあり、南端は西の沢川に接している。現在は水田と畑が多い。

マネゾエとは何か。わからない地名であるが、敢えて二説を挙げる。

①ネ←ヌ（沼）の転じた語で「湿地」をいい、マは単なる接頭語であるという（以上は語源辞典）。従って、マネゾエとは「湿地に沿った土地」をいう。

②マネ←マデと転じたもので、ネ←テは通音であるという（語源辞典）。マデはモウデルの文語マウズ（詣）の連用形が名詞化した語マウデの変化したもの（国語大辞典）。以上から、マネゾエとは「(寺社に)詣でる道添えの土地」をいうか。近くにハッチョウジ小字があるのが気になる。ハッチョウジが郡寺であれば、ぴったりするのであるが。

全国地図には、マネゾエ地名は記載されていない。

【美佐山・美佐山原】

ミサヤマ・ミサヤマハラ。

これらの小字は、北本城・南本城の北方にあり、ミサヤマハラ小字が二ヶ所、ミサヤマ小字は一ヶ所に、いずれも小さい。小字発生時には、一つながりで面積も大きかったと思われる。

ミサヤマもミサヤマハラも「諏訪神社のミサヤマシンジ（御射山神事）が行われたところ」をいう。

諏訪大社の上社の御射山神事は八ヶ岳

山麓の原山で、下社は霧ヶ峰の八島で行われ、いずれも祭場は諏訪大社からは離れたところにある。

座光寺の場合も、麻績神社の御射山神事が行われたミサヤマ小字群と麻績神社は南北本城を挟んだ反対側にある。

全国地図には、ミサヤマ地名は3ヶ所にしかなく、ミサヤマハラ地名は載っていない。

【溝下】

ミゾシタ。

この小字は、国道153号線を跨いでおり、県道上飯田線との交点の東隣にある。

ミゾ（溝）とは「地を細長く掘って水を流すところ」（広辞苑）だという。

従ってミゾシタとは「井水が流れている下方の土地」をいう。井水は急流にはならないので、井水の上下ははっきりしていて、こうした地名が生まれるのであろう。ここの井水は、まさに「溝下井」である。

全国地図には、ミゾシタ地名は二ヶ所にあり、いずれも「溝下」の字が宛てられている。

【道添】

ミチゾエ。

この小字は、土曾川と西の沢井の間で、共和農業生刈る改善施設がある。

ミチゾエとは「道路沿いにある土地」をいう。ただ、ここの道はたくさんあって、どの道のことを指しているのかは、はっきりしない。

全国地図にはミチゾエ地名は5ヶ所に、中・大字として記載がある。

【南澤】

ミナミサワ。

この小字は低位段丘面Ⅱの東部で、県道上飯田線と土曾川の間点付近にある。

ミナミサワとは「座光寺の南部を流れ

る谷川のあるところ」をいうのであろう。現在は西の沢川や焼原井が流れているが、井水前には水量の少ない泉を水源とする川が流れていたのであろう。それは井水前の西の沢川であったかもしれない。

全国地図には、ミナミサワ地名は28ヶ所に中・大字として挙げられており、その全てに「南沢」の字が宛てられている。

【宮崎】

ミヤザキ。

土曾川とその南方の栃ヶ洞沢の間の緩傾斜地にある大きな小字で、県道飯島飯田線が中を通っている。

ミヤザキとは何か。語源辞典によりながら、二説を挙げる。

①ミヤザキとは字面通りに考えれば、「神のいる段丘の先端部」をいう。しかし、神の痕跡は、小字内にある県道飯島飯田線の沿道にある「御嶽山」と「天神宮」の石碑のみで、やや不安が残る。

②あるいは、ミヤはミ(水)・ヤ(菴)で、ミヤザキとは「湿地の多い段丘先端部」であろうか。

全国地図には、ミヤザキ地名は多く、53ヶ所が中・大字として挙げられている。

【宮崎上洞】

ミヤザキウエボラ。

上郷境とミヤザキ小字に囲まれた小字で、大きな崩壊跡が栃ヶ洞沢に開口している。

ミヤザキウエボラとは、「ミヤザキ小字内にある上流側の洞」をいうのであろうか。

【宮田垣外】

ミヤダガイト。

座光寺北部の低位段丘面に二ヶ所ある。

ミヤダ(宮田)とは「神社に所属し、その収穫で神共をととのえるための水田」(国語大辞典)をいう。

従って、ミヤダガイトとは「神社に祖属する水田で、屋敷のあったところ」か。むろん免田であったらう。

ミヤダガイト地名は全国地図には見当たらない。

【宮の前・宮ノ脇】

ミヤノマエ・ミチャノワキ。

これらの小字は麻績神社の周辺にある。ミヤノマエ小字が一ヶ所、ミヤノワキ小字が二ヶ所にある。

ミヤノマエとは字面の通りで「麻績神社を含めた前の土地」をいう。ミヤノワキとは、一つは「神社参道の脇の土地」をいい、もう一つは「麻績神社の横手の土地」をいうのであろう。

全国地図でも、ミヤノマエ地名は94ヶ所、ミヤノワキ地名は26ヶ所と多い。

【向島】

ムカイジマ。

座光寺地区の最南東隅にある。

ムカイジマとは「(座光寺側から見て)向こう側にある島」をいう。小字発生時には、天竜川の中にあつた中洲だったのであろう。

全国地図には、ムカイジマ地名は、中・大字として10ヶ所に挙げられており、うち9ヶ所は「向島(嶋)」の字が宛てられている。

【田中・田中前・田中畑】

タナカ・タナカマエ・タナカバタ。

これらの小字は国道153号線の南東側にある。

タナカとは何か。二説を挙げたい。

①タナカとは「水田地帯の中にある屋敷」をいうのであろうか。

②あるいは、固有名詞とみてタナカとは「タナカという有力者の屋敷があつた所」か。

タナカマエとは「有力者の屋敷の前にある土地」であり、タナカハタとは「有

力者の所有する畑」となりそうだ。

【向田】

ムカイダ。

低位段丘面Ⅱにあり、タナカ小字と段丘崖との間にある。

ムカイダとは、「有力者の屋敷からみて、向こう側にある土地（田んぼ）」であろうか。

全国地図には、ムカイダ地名は中・大字として、41ヶ所に採られている。

【無常堂】

ムジョウドウ。

この小字は、元善光寺北側の山地中腹部の平坦地にある。

ムジョウドウ（無常堂）とは「死にかかっている病人を収容するところ」をいう（国語大辞典）。どのような病人が対象であったのか、またどのような対応がなされたのか、具体的なことはわからない。

全国地図には、ムジョウドウ地名は記載されていない。

【持井田】

モチイダ。

座光寺北部の低位段丘面Ⅱにあり、ミヤタガイト小字に接している。

マチイダとは何を意味しているのか。モチイはモチイ（餅）でモチ（餅）の古称だという（広辞苑）。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①モチイダ＝モチダで、モチダ（持田）は「ミヤモチダ（宮持田）の上略で「宮田」のこと。従って、モチイダとは「神社領の田んぼ」を意味する。隣がミヤダガイトであることとよくマッチしている。

②モチダ（餅田）は「餅米をつくる田」であろうか。餅米は神事ともかかわりが深い。

モチイダ（持井田）地名は、全国地図に一ヶ所だけ、中・大字として挙げられている。

【元宮】

モトミヤ。

この小字は、南大島川が天竜川に合流する地点の氾濫原に、五ヶ所もある。

モトミヤ（元宮）とは、「以前にお宮があった所」をいう。

村史によれば、年代不詳であるが「天龍川の中洲に漂着した『お志満様』を里人が拾い上げ川原本宮へ祀る」とある。これが嶋三社で、ここに“本宮”とあるのがモトミヤ（元宮）であろう。その後、シラヤマ（白山）さらにカミカワラ（上河原）へと遷座し、今は麻績神社の境内神社として祀られている。

全国地図にはモトミヤ地名は、11ヶ所に中・大字として挙げられている。

【焼原】

ヤキハラ。

この小字は土曾川近くの氾濫原の段丘崖と上下の平坦地に二ヶ所ある。

ヤキハラとは何か。ハラはハラ（腹）で段丘崖とその上下の平坦地を表している。中腹部といってもいいかもしれない。ヤキハラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ヤはヤツ（菴）の略で「湿地」をいい、キは「場所」を示す接尾語。従って、ヤキハラとは「湿地の多い中腹部」であろうか。

②ヤキはヤキハタ（焼畑）を意味するか。つまり、ヤキハラとは「焼畑耕作を行っていた中腹部」であることもあり得る。

全国地図には、ヤキハラ地名はなぜか記載がない。

【薬師・薬師垣外】

ヤクシ・ヤクシガイト。

これらの小字はJR元善光寺駅の北東側で、線路の南東側を主として北西側にも分布する。ヤクシ小字が二ヶ所、ヤクシガイト小字が三ヶ所ある。

延享年間(1744~1748)に編まれた『伊那郡神社佛閣記』に「座光寺原—阿彌陀堂・十王堂・薬師堂」とある。この薬師堂があった所とその付近が、ヤクシ小字群を結んだ範囲にあったのではないか。

薬師如来は人が身体の不具や業病に悩んでいたたり、死の病に悩んでいたとしても、薬師の名を聞くだけで、その苦しみから救われるようにしたいと誓願を立てている。このことによって薬師如来は現世利益の仏として庶民の信仰を集めた。特に近世以降は、眼病治癒の仏という特長が加わった(仏教民俗辞典、民俗大辞典)。

ヤクシガイトは「薬師堂かそれに関わる人達の屋敷があったところ」であろうか。

全国地図には、ヤクシ地名は15ヶ所に中・大字として記載がある。

【休石】

ヤスミイシ。

座光寺小学校の東側の広い傾斜地にある小字。

ヤスミイシ(休石)は「史上の著名人がその石に腰かけて休んだなどの伝説をもつ石。また、その伝説」(国語大辞典)であるというが、この座光寺のヤスミイシについては伝説の有無がはっきりしない。

ここでいうヤスミイシは「腰を掛けるには手頃な石があって、眼下の風景に癒やされながら休めるところ」をいうのであろうか。

その石は、小学校グラウンドの東側にある小丘をさしているのかもしれない。

全国地図にはヤスミイシ地名は6ヶ所に中・大字として採られており、その全てに「休石」の文字が宛てられている。

【柳河原】

ヤナギガワラ。

この小字は天竜川氾濫原にあり、シラヤマ小字群やイカヨケ小字群の中にある。

ヤナギガワラとは、文字通り「ヤナギ属の植物が自生している川辺の砂地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ヤナギガワラ地名は、中・大字として、一ヶ所に挙げられている。

【藪添】

ヤブゾエ。

JR飯田線の南東方にあり、並木沢川と西の沢川の間になっている。

ヤブ(藪)は「低木・草・竹などが手入れもされず乱雑に生い茂っている場所」(国語大辞典)をいう。従って、ヤブゾエとは「低木・草・竹などが乱雑に生い茂っているところの傍の土地」ということになる。

しかし、これだけでは小字にはなりにくい。一寸でも土地が欲しいはずの住民が放置しておくには、それなりの理由があっただろう。そこで、語源辞典がいうように、「由緒のわからなくなった屋敷神などにちなむ藪神」の鎮座する土地ではないだろうか。その放置されている祭場を荒らすと疾病など激しい祟りを発現するという。

ヤブ関連小字は伊那谷南部には多い。伊那谷小字の特徴の一つと思えるがどうであろうか。

【山神・山神下】

ヤマノカミ・ヤマノカミシタ。

これらの小字は天竜川氾濫原と上に登る段丘崖にある。

ヤマノカミは「山に棲むと考えられている神霊の一般的名称」(民俗宗教辞典)である。その神の名がなぜ川原にあるのか、よくわからない。山神は河童に結びつくことがあるというが、そこで水神の神格が顕れてくるくるのだろうか。

元禄四年(1691)の報告には、大門・

中・米野・びじよの四ヶ所に「山の神」が挙げられている。しかし、これらの地区は、いずれも座光寺西部の山地で天竜川氾濫原とは離れている。

なぜかという疑問は、まだ解けないままになっている。

もう一つ疑問がある。ヤマノカミシタ小字は二ヶ所にあるが、その一つはヤマノカミ小字の上流側にある。この小字発生時には、その上流側にヤマノカミ小字があったのであろうか。

全国地図には、ヤマノカミ地名は70ヶ所に中・大字として挙げられている。

【山古瀬】

ヤマコセ。

この小字は、北部のウエノとフルイチバの小字に挟まれ、一方をヤスミイシ小字の傾斜地に接している。

ヤマは「耕作地」か「墓地」であろうか。コセは長野県の方言といわれているが「一方が山側になっている道」のこと（以上は国語大辞典）。

ヤマコセとは何か。二説を挙げたい。

①ヤマコセとは、「一方が山側で、他方が耕作地になっている道のあるところ」をいうのであろうか。

②ヤマコセとは「一方が山側で墓地もある道」をいうのかもしれない。隣のシャグジ小字には墓地がある。隣になってしまうのが弱みか。

全国地図にはヤマコセ地名は記録が無い。

【山田・山ノ内】

ヤマダ・ヤマノウチ。

二つの小字は繋がっており、ヤマノウチ小字の方が山側にある。土曾川左岸氾濫原のナギジリ小字の山側になる。

ヤマダとは「山にある田んぼ」をいうが、現在は畑地になっている。崩壊にある土地で、小字発生時には田んぼであっ

た可能性は高い。

ヤマノウチは「山地の中」であるが、それ以上のことはわからない。あるいは、正月に山入りの神事が行われたかもしれない。

全国地図には、ヤマダ地名は296ヶ所、ヤマノウチ地名は32ヶ所が、中・大字として記載がある。

【山ノ外】

ヤマノソト。

この小字は、南大島川の氾濫原とその上の緩傾斜地にある。

ヤマノソトとは「山地の外側になる低地」を意味するのであろう。

全国地図には、ヤマノソト地名の記載は無い。

【山ノ手】

ヤマノテ。

この小字は、コタカヤシキ小字の北隣にあり、更にその南には元善光寺がある。

ヤマノテとは「山に近い方の土地」をいうが、基準になるのは、寺社か有力者の屋敷であろう。この場合の基準は、小高屋敷か元善光寺になるが、どちらとも判断が付きかねる。

全国地図には、ヤマノテ地名は12ヶ所に中・大字として挙げられている。

【山道端】

ヤマミチハタ。

この小字は北部のハラダ小字の周辺に三ヶ所ある。

ヤマミチハタとは、字面の通りで「山地の緩傾斜地にある道路付近の土地」をいうのであろう。

全国地図にはヤマミチハタ地名は無い。

【山道下】

ヤマミチシタ。

土曾川近くのイシヅカ小字とセンゲン小字の間にある小さな小字である。氾濫原と側稜の斜面とに挟まれている。

ヤマミチシタとは、「山中の道の下側の土地」をいう。

全国地図にはヤマミチシタ地名も記載は無い。

【湯戸ノ免】

ユドノメン。

北部のタカオカ小字の北隣にある小さな小字である。

ユドノメンとは何を意味するのか。仮説を一つ挙げる。ユドノメンはユドノメン（湯殿免）か。「浴場を管理維持するために免租されているところ」ということになってしまう。まさか、という思いも強いが、他に考えようがないのでこのままにしておく。浴場が温泉によるものか、燃料を使って維持するものなのかは、むろん明らかではない。しかし南大島川の対岸では温泉が出ているので、温泉を否定することはできない。

全国地図には、ユドノメン地名は載っていない。

【弓矢沢（澤）】

ユミヤサワ。

これらの小字は、南大島川右岸の沿岸に添って帯状に分布している。

ユミヤサワとは何か。ユミは「弓状に曲がった川筋」をいい、ヤ＝ヤツ（菴）で「湿地」を意味する。以上から、ユミヤサワとは「弓所に曲りながら湿地を流れる谷川」をいうのであろう。

全国地図には、ユミヤサワ地名も記載が無い。

【横道上・横道下】

ヨコミチウエ・ヨコミチシタ。

大きなヨコミチウエ小字に大堤団地があり、そこから西に向かってヨコミチシタ小字とヨコミチウエ小字が並んでいる。

ヨコはタテ（縦）に対する語で、ヨコミチ（横道）は、「等高線に沿った道」をいうのであろう。

従って、ヨコミチウエとは、「等高線に沿う道の上側にある土地」をいい、ヨコミチシタとは「等高線に沿う道路の下側にある土地」をいうのであろう。

全国地図にはヨコミチウエ地名は無いが、ヨコミチシタ地名は一ヶ所にだけある。

【四ツ田】

ヨツダ。

この小字は、天竜川氾濫原のドソガワ小字の北東隣にある。

ヨツダとは「四枚の田畑があったところ」であろうか。

これ以外の解釈はできなかった。

全国地図にはヨツダ地名は載っていない。

【六反田】

ロクタンダ。

この小字の中を国道153号線が通っている。

ロクタンダとは「六反歩の面積をもった田んぼだったところ」であろう。近くにはゴタンダ（五反田）小字もある。

全国地図にはロクタンダ地名が、中・大字として8ヶ所に挙げられており、いずれも「六反田」の字が宛てられている。

【脇ノ田】

ワキノタ。

この小字は土曾川氾濫原に、二ヶ所ある。

ワキノタとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ワキ（脇）は「傍」の意で、ワキノタとは「（土曾川の）そばにある土地（田んぼ）」をいうのかもしれない。

②ワキは動詞ワク（湧）の連用形が名詞化した語で、「湧水地」をいう。従って、ワキノタとは「自然湧水のある土地（田んぼ）」をいう。

タ（田）か、それともタ（処）である

かが分からないので併記した。

全国地図にはワキノタ地名は記載されていない。

【高岡下・高岡南】

タカオカシタ・タカオカミナミ。

これらの小字は、JR飯田線に跨っており、元善光寺駅の北東側にある。

タカオカシタ小字は東側に一ヶ所、タカオカミナミ小字は西側に四ヶ所ある。

タカオカシタとは、「高岡の下方にある土地」を意味し、タカオカミナミは「高岡の南方にある土地」をいう。

【南原】

ミナミハラ。

県道飯島飯田線を跨がり、ダイモンバラ小字の南隣に接する広い小字である。

ミナミハラとは「(大門原の)南の方にある山地の中腹部」を意味する。

全国地図には、ミナミハラ地名は42ヶ所に中・大字として挙げられており、うち41ヶ所で「南原」の字が宛てられている。